女學雜誌

第二百二十二號目次

社說　女塾別舍主義○詩仙
論說　在布哇受洗の始末(安藤太郎)○慈善事業に對する婦人の心得(獨逸國博士スピンチル氏)
批評　トルストイ伯○撰擧權を剝奪すべし○歸朝後の感慨
雜錄　家有る后ち一年の感○富國の基ひ○家政科の教授に在り○夜更けの星○農家の至樂○人殺ろし○難める人の爲に勵む○靜女塾主、平尾光子女史を訪ふ○きよめぬ庭
小說　うき世
寄書　避暑地案內(下)○美服人の指ざゝんとを患ふ(小池梅蹊女)
開書　女學孃の誕辰を賀す○交詢
時事　條約改正○日本人を殺せし罪人○メソヂスト婦人年會○閨后のさゝやき○議員上京の折は○文明國に野蠻人多し○佛國に於ける佛徒○衆議員中の信徒○婦人雜誌○卒業女學生○廢娼記事
女報　跡見女學校生徒の義捐金○產婆改良の成蹟○鹿島貧民殖業學校○頒榮女學校○同文學會○明治女學校○獨立女學校○ナイテンゲール○女子速記○篤志婦人○其他數件

Human phenomena are the last to be reduced to scientific rule. Comte.

女學雜誌社通信員約則

權利

一 通信員は女學雜誌を每號無代價にて落手す。

二 通信員は定時報告の餘分に爲したる報告に對し若干の謝禮を受く、尙ほ定時の報告さへども格外の價値ある者若くは非常の骨を折りたる者は特に謝金を受く。

義務

一 通信員は每週一回ハガキにて、每月一回郵書にて、其在地の景況を報告すべし。

二 報告すべき景況は、主として婦女子に關する事を旨とすれども、凡そ教育、慈善、美術、文學、篤行、の事若くは奇異例外の出來事は總べて女學雜誌の所語するもの也。

三 寄宿所を變へたる時、又は引つゞき不在の節は其旨報告すべし。

四 至急を要する件は電報にて飛信すべし電報料は直ちに返却すべし。

五 總べて報告書の表面には通信の二字を朱記すべし

右有志の人は履歷書を添え申込あるべし。

七月十九日發兌　第二百廿二號　一冊定價六錢

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 221. July, 19th, 1890.

目次第二百二十一號

EDITORIAL :—On Japanese Poetry.

LEADING ARTICLES :—Mr. Ando's Account of His Own Conversion. Woman's Philanthropy. (Dr. Spinner.)

CRITICAL NOTES:—Count Tolstoi. The Voter's Right ought to be Limited. Home from Abroad.

MISCELLANEOUS:—A Home One Year Old. The Teaching of Domestic Economy, the Sourse of National Wealth. The Midnight Stars. The Delights of a Home on the Farm. Man-Slaughter. Work for the Suffering. An Interview with Mrs. Hirawo. Humorous.

NOVEL :—"Ukiyo."

OPEN LETTERS.

CONTRIBUTED ARTICLES.

NOTES AND NEWS.

CONCERNING WOMEN.

社説　帰る人、迎ふる人○詩仙

論説　在布哇國受洗の始末(安藤太郎)○慈善事業に對する婦人の心得(醫學博士スピンナル氏)

批評　伯爵杜氏學校管理術○安寧館○議員列傳○報知新聞○江湖新聞○贈書

雑録　静女塾主平尾光子女史を訪ふ○人情○さびしさ○コレラの好む所○今は採集の時なり○女性の言葉つき○吉田松陰先生の女論○懸賞狂文○驚かすナレを言ふ○慈善事業

小説　うき世(八)

寄書　思ひ得たることゞも

開書　讒謗失體の諸君に告ぐ○交詢

時事　大上獄中の獄舎○此度びの選擧○市中の君子○明日○弥草弁木○何の日清まん○短歌行○田口卯吉氏がなし○托鉢○米國女子獨立幅擴張會○バツトレル夫人○卒業女學生○聡明記事

女報　御巡行○大井幸子○神戸英和女學校○京都同志社女學校○スタンレー氏の佳偶○讃美傳教人會アフライトルーカス夫人○其他數件

Women in Japan.

GRADUATES FROM THE MISSION SCHOOLS.

I.

"The Baika" (Osaka):—Misses Miyagawa and Gulick from the Elective Course: Misses Tateishi, Araki and Yagami from the Regular Course and Misses Yoshimoto, Tateishi, Araki, Nakashima, Kamahara and Otsuka from the Japanese Course.

"The Eiwa" (Kobe):—Misses Tsukamoto, Kimura, Hasebe, Mori and Kawamoto, from the Higher Course: Misses Naruse, Nagaya, Iwaishi, Taketomo, Murayama, Ashidate, Tainaka and Osawa from the Regular Course.

"The Kaigan" (Tokyo):—Misses Ishikawa, Imai, Midori, Matsumoto, Shimizu, Ōi, Murai, Masuda, Hara, Yamazaki and Kazue.

"The Tōyō Eiwa" (Tokyo):—Misses Ōtake, Yamaoka and Yamaguchi.

"The Meiji" (Tokyo):—Miss Soga.

"The Ferris Seminary (Yokohama):—Misses Matsuda and Hayaguchi from the Grammar Course; Misses Hoshino and Hirano from the Academic Course.

II.

The 1st & 2nd prizes in foreign Painting Exhibited at the 3rd National Exhibition are Awarded to a lady, Miss Tsukahara.

III.

"The Ladies' Charity Society" of Yokohama is Planning an Industrial Home for destitute girls, especially for reformed prostitutes. Mrs. Van Petten and Mrs. Sue Inagaki at present have charge of the work.

IV.

"The Ladies Annual Conference" of the Methodist Missions met at Aoyama last monday, (14th). It has unusually well attended.

V.

A class in shorthand writing at "the Meiji Jogakko" has just finished its two terms' Course and is carrying on the practice.

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第二百二十二號 明治二十三年七月十九日發兌

社説

女塾別舍主義

女學校塾舍の管理は、之を別舍主義にするを以て最良なりと信ず。今の如く、一の大ひなる塾舍を室によりて區分し、壁一重を隔てて御殿女中の部屋に似たるもの幾つをも設け置く時に於ては、女中群居の弊勢ほひ免る可らずして、甚はだしきは折助部屋の殺風景を演ずるに至らんと亦無きにしもあらず。よし左なくとも、斯ては女生に第一必要なる家政學を實地に敎ゆるの便至つて乏しく、殆んど其方法を得ざるの憾み多からんとす。中には煮焼の取締を全たく學校の手より離ち之を悉とく寄宿女生に一任する所ろもあり、此は全く然る類ひの事を爲さゞらんよりは多少の効能あると勿論なりと云へど、若し數十人、百數十人の女生に之を托するとせば、勢ほひ其人數を割つて之を輪番にせざる可らず、然る時は番に當る者は其間だ多少之に注意すれども番に外れたるものは尋常の寄宿生に異ならず、風儀依然としてなみ／＼の書生に異なることなけん、而して當番中に幾干か經驗したる心得も之を日々に行はざる時はヨリの戻ると意外に早く、所謂る五日温ためて十日冷やすの損少かるまじ、乘除して遂に左程の益なきことを知る也。

況してや女學生の敎育に大切なるは、啻に其煮焼の藝のみならず更に一家を温ためホームを美しくするの覺悟をも深く敎へ置くの事にあり、而して此の一家を美にし温たかにするの覺悟、即はちホームの女王たるに必要なるの資格を養はんとには、平素之に説法して、姑舅には斯々仕へよ、親類には斯々交際せよ、室内のかざり客のもてなし下婢の仕へ方時間万事の取きめなんどは、斯々斯々にせよと、一々に之を講述敎導すとも、同時に實際其習慣を發成するの工夫備わらずんば、千百の説法も風の吹きて止まらざるが如けん、左して効能を殘すべきにあらず、尙且つホームに適するの資格を煎じ詰れば、温柔なるにあり、愛深きにあり、我儘ならぬにあり、氣の着くにあり、取締りのヨキにあるなり、而して此等の資格は激塲に於ける演説を幾百回聽聞すとも夫にて能く具備するものにあらず、日夜其心掛を爲して漸次に習慣を積み久しうして知らず／＼其德を立つるにあらずんば成就しがたきもの

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

也。然るに尋常の寄宿舎は多人數合宿するによりて一種の悪人氣を生じ、さま〴〵の忌わしき邪情を起す、夫れ友人とし、同室の友とし、又同舎内の合宿者として常に懐くべきの愛情未だ温かなるを得ずして、寧ろ先づ嫉妬、怨恨を發するに至らば、人中にもまれ〳〵て、性質悪しく曲がり、根性ひがみて、治しがたきの癖を生ずると間々實例あり、如此くんば寄舎は女學生をしてホームの女王たるに適當せしめつゝある者にあらず、寧ろ其貞操性質を毀ちつゝある者と云ひて可ならん。

然るに吾人が所謂る別舎主義は、寄舎を別々に設立し、一の別舎毎に七八人を容れて之を純然たる一個の家族と見做し、中に一人の取締を置きて之れを主婦もしくは監督人となし、他の七八人は同列之れに仕へて交る〳〵家政を理し、或る者は或る時帳面方となり、又或る者は或る時臺所掛りとなり、斯くして相勞を分ち利害苦樂を共にし、朝夕万事を一つにして全然一家族の如くし、特に折々は教師を招き之を客として接待し、又遊びの時間出歩るきの時を定めて散歩逍遥を同時になし、總じて何等の樂しきをも苦しきをも皆な之を相分つことを為さんには、此一家族たる一別舎は、愛情に於ては互ひに同胞の如くに思ひ、經濟に於ては利害を共にして損益の結果を直接に負擔し、料理、裁縫、洗濯、經理、接客等の事を一々實際に試み行ふことを得、恰かも後に相別れて個々獨に一家の主婦となるの試驗を為すものゝ如くなれば、其効極めて大ひならんことを確信す。

而して此主義を實行するは左して六かしきことにあらず、校地適宜に廣ろければ、之に相當なる家を、間合ひ宜しきほど別々に建設し、扨て此家に一人づゝ才力あり德操あり經驗あるの長者婦人を任用すれば則はち可なり、他に何等特別の必要を求むることなし。

吾人は此主義の良善なることを確信し、其の成るべく廣く實行せられんことを祈る、米國にても此類の仕組にカッテイヂ、スシテムの名を下し、今や二三の女學校にては試み中なりと云へり。府下明治女學校の如きも客夏より漸く之に着手せらるゝと云へば、吾人は其効果の速に現はれて、此主義の普く行はるゝことを明證し以て女生寄宿舎の弊風を一洗し去らんことを祈り、且其日の一日も速かに來らんことを祈る。

〰〰〰

著名なる閨秀諸女史の肖像を新發明亞鉛版に寫し次號より追々掲載すべし地方の通信員に於て其地方著名の閨秀の寫眞手入次第早々送り給ふべし。

詩仙（中）

歌の論

歌を論ずるもの多し、其論の吾人が卑見に同じきもの亦た尠からず、蓋し其論者は之をさま〴〵に言ひ現はし、眞理の見様、方を同うせずと雖ども、窮極到底する所ろ遂に一に歸せずと云となし。伴蒿蹊は、たゞ眞心のまゝを美はしき言葉にて言ひつゞけ天に背かず人に背かずして其眞を語ると云り。荒木田久老は、歌は風致言葉のしらべを第一とし、理は後にして諷詠の趣むきを先きにすと云へり。加茂眞淵の一流は、歌はたゞ心なり姿なり、眞を現はして心を示めすものなりと云へり。斯て、基俊も、歌の道に於ては人の教によらず心の發する所ろ也たゞ心の至ると至らざるとが致す所ろなりと云ひ（和歌口傳抄）。定家も、歌をいづくより出入するぞと問はゞ心の誠より出入すると云はん、心は虚空に住して空含万象、此の空より出入するなりと云ひ（詠歌の大概）。貫之も、大和うたは人の心を種として万の言の葉とぞなれりけると云ふ。其他、京極黄門が、歌よむには心をすますを第一とすと云ふとの如き、頓阿法師の、歌をよくよまんには三昧に入るが如く心をしづめて幽玄の界に入り思ひめぐらすべしと云ふとの如き、皆な共に一つの事を言ふなり。即はち心を靜め念ひを清くして嚴かに天地に通じ、其美妙に感應してすら〳〵と眞心を詠み出でよと云ふなり。是れ豈に吾人が謂ふ所ろの「調和論」、を各者その一面々々に於て論じ來るものにあらずや。香川景樹の言ふ所ろの如きは、更に明らかに此理はりを示すに似たり、其の丸山辰政に答ふるの書に云く、

歌は言語の精なるものにて平語には入くみて聞とりがたき事も歌にしらぶる時はすら〳〵と聞えて且つ感ずる迄にも及ぶとに候。歌は思ふまゝを述ぶるものに侍れど在のまゝを言ふものにあらず我言に、歌はことはるものにあらずしらぶるもの也と申候。一首の上にも精神を入れ假りにも賤しき調を交へず美はしく調べたつるとに候。うづ高く美はしきは即はち天地の心にてやがて天地の調べなり、此のしらべを得たるを好き歌とす所謂る邪しまなき性情の聲にて眞の調べなり、此誠心の美はしきとは天地の聲なるゆへに天地感ずるに容易すく眞心のしらべなるが故に鬼神の哀憐ふかし。

又た、西郷元命へ答ふるの書に云へらく、

三

いにしへの歌の心を考がへ知るに容きほどの書物候へどもよみ歌の爲めになる書と申すものはとんと無きものに候只だ誠を立る許を見るが宜しく候儒佛神はいづれなりとも誠だに立ち候へば自づから筋道りて深き美はしき歌しらず知らず出來べしと。

此に於てか、翁こ詠歌の極意をうたひ、

天地の動くしらべを得ぬれば　こゝろの奥の峯の松風

とよみたりける。門上の所論まことに能く歌の妙處を説き盡すと云ふべし、其は歌は、人の眞心の天地の眞心に感通し、一點の邪念を挿はさまず、些末の疑心を入れず、則ち成ずる所ろのまゝ、信ずる所ろのまゝを、在のまゝに詠み出づるにありと云ふ也、從に之れ心身腑底の調和を以て天地人間の調和を得り、一身渾化して、知らず口に所感所激を發吟するの境ひにあらずや。

歌の弊

歌の論まことに美し、左れど歌に弊多きを奈何にせん。夫れ古しへの人は、たゞ感あるの時歌を詠めり、故に眞の歌を得たり、後の人は歌を詠むに非ず、歌を作るあり、彼れ未だ心に於て感激する所ろあらず、たゞ偽はつて其情を製造し、強いて其思ひを述ぶると云へり、安んぞ眞誠の歌あるを得んや。漸やくにして大歌所出で來、師弟と云ふもの、歌の派と云ふものも出で來にたり、春野秋夜眼上にさむらひ歌の題に胸をこがし、境に臨まずして風光を假想の間だに構へ、情至るにあらずして逆りに物わらそひ、風俗の歌を聞はせ、袖にたまらぬ白露は、せきあへぬ涙淵に未だ及ばず、袖のみぬるるは身さへ流すよりも思ひ偽はしと歎じ、詠歌は總べて是れ一種の闘詠とはなりぬ。於世乎、さまざまの制限を立て、禁句制詞を設け、歌に器械的の束縛を施こす。或は字を毎句の上に折り入れ、或は上下に插入れ、又或るひは初めよりも下よりも同じく讀まるゝやうにおし、又或るひは題をかくし入れ、何を敬れたゝむの類、曲製所作、手を盡さずと云ふよなし。神聖の第一を度び汚がさる、此に於て賞賛するもの、利を食ぼるもの續々として出づ、蓋し和歌は既に人の眞心を現はすの具とならずして、其の私慾名利を衒ふの邪道とはなれり、歌のいよいよ道に流さかれる、尤もその甚と云ふべし。能因法て白河に遊びたるとなし、但だ夫れ、

都をば霞と共にたちしかど秋風ぞ吹く白河の關

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

と詠じ、其詠の實に眞心より出でたらんやうに持て囃されんことを欲し、日に面をさらして黒くし、暫らく人を離れて世を歎かんとは爲しける。又た、待賢門院の女房、加賀と云へる者、

兼てより思ひしことよ伏し柴の
樵る斗りなるなげきせんとは

と詠み、巧みに棄婦の悄けなき思ひを述べたるとき、則はち之を眞にせんことを欲して、わざと人に馴そめ、わかれて後ち初めてよみ出でたるとのやうに言ひふらしける。夫れ、匹婦すでに歌の爲めにウソを吐くことを譽れとし、法師も亦た此の虚名を得んとして情を僞はり之を風流とするに至る、歌の眞を去る此に至りて其千里ならざることを知るべし。

故にすべての物進歩すと云へど、歌は古より年を追ふて漸やく退却したり、深澤薫その國風發蒙に云へらく、

古今歌の相違は、内によまする者ありてよみ出ると好き歌よみて人にも見せんと思ひて我とわが構へて讀むと、此二つ古しへ今の歌のわかちにして、歌の樣も自から誠わると、わざと詞を飾りておもしろからせんと構へ出で誠少なきとあり、古人に及ばざるはこの所ろにあり。

加茂眞淵亦た其の万葉集考の序に於て歎ずらく、

古しへの歌は人の眞心あり、後の世の歌は人のしはざなり、古しへの歌はふつゝかなる如くして能く見ればみやびたり、後の歌は寛かなる如くして能く見れば苦し氣なり、古しへの歌は墓なき如くして能く見れば眞也、後の歌は理わりある如くして能く見ればそら言あり、古しへの歌はたゞ言の如くして能く見れば、心高きなり、後の歌は巧みなるが如くしてよく見れば心淺きあり。

故に歌は漸やく退化し、本然の誠を離れ、人爲の僞はりに沒せり、代々の歌人しきりに之を歎じ、疾呼して其のあやまりを辨ずる大聲聞えざるにあらねど、狂瀾容易く反ることかたし、歌を聖にするの望み殆んど絶へなんとせり。

歌の美

歌の弊極まりぬ、左れど徳川氏の中葉に至りて復古の氣運稍や熟し、長流、春滿、季吟、契沖等起りて古學を唱へ、遂に加茂眞淵出て、本居宣長出て、最後に後世の人丸……香川景樹出るに及びて、詠歌の道則はち古しへに反へりぬ。而して彼等が尊とぶ所ろは、万葉古今の二集にして、特に其の万葉にありとす、云く、万葉古今は正花の如し、其以後の歌は造り花の如し、眞の花は山峒に咲ても或は唯だ一花開きても、すで

に天地同様なれば綵香を追ひ、幽路を蹈ふに至ると。

去れば歌は万葉に初まりて万葉にかへる、中頃ろ様々の途に分け入れるは喩へば放蕩の子が旅したるに同じ、從に亦た其古郷に歸りて自然の愛情に安んず。古人は万葉集の歌を以て歌の至れるものと云ふに憚はず、然れども多くの歌人は皆な之を理想とし、代々の歌も亦た之を標準とせりと斷言せずんばあらず、則はち万葉の歌は日本の歌の龜鑑にして亦た其の理想なりき、かるが故に若し万葉の歌に美所あらば、日本の歌に美所あり亦あるとを得るなり、其美所の如何なる性質たるやを穿ち了るとを得ば、則はち日本の歌の長所何處にあるかを知り悉すとを得べし、請ふ之によりて嘗みに我國のポエツリーを評せん。

貫之の云はく、

古しへの代々の帝春の花のあした秋の月の夜毎にさふらふ人々を召して事につけつゝ歌を奉まつらしめ玉ふ、或は花を戀ふとて便りなき所ろに惑ひ、あるは月を思ふとて知る邊なき暗にたどれる心々を見玉ひて賢し愚かなりと知ろし召しけむ、然あるのみにあらず、さゞれ石にたとへ、筑波山にかけて君をねがひ、喜び身にすぎ樂しみ心に餘り、富士の煙によそへて人を戀ひ、松虫の音に友を忍び、高砂住の江の松も相生のやうに覺え、男山の昔しを思ひ出て、おみなへしの一時をくねるにも歌を言ひ出てぞ慰さめける、又春の朝に花の散るを見、秋の夕暮に木の葉の落るをきく、或るは年ごとに鏡のかげに見ゆる雪と浪とをなげき、草の露、水の泡を觀てわが身を驚ろき、或るは昨日は榮えをごりて時を失ない世にわが親しかりしもうとくなり、或るは松山の浪をかけ、野中の水をくみ、秋萩の下葉をながめ、あかつきのしぎの羽がきを數へ、或るは吳竹のうきふしを人にいひ、吉野の川を引きて世の中をうらむ。

貫之は能く古歌の美所を穿ち了れり、更に一層其理想とする所ろを叙述し盡せり、而して其の美所とし理想とする所ろのもの、果して如何ほどの美、如何ほどの大、如何ほどの實を具備するや。

大道不レ稱、大辯不レ言、大仁不レ仁、大廉不レ嗛、
大勇不レ忮、道昭而不レ道、言辯而不レ及、仁常而不レ成、
廉淸而不レ信、勇忮而不レ成、五者园而幾レ向レ方。（莊子）

論説

在布哇受洗の始末（中）

安藤太郎君演述

扨此書物は御承知の方もありましよふが其論説は中々澤山よ有りまして今玆で一々申上げる譯には參りませんしかし其大意と申ハ詰り基督の救ハ何故我々人類に必要なるやの理由を說きましたる者で第一よ人間ハ宗教的の活物であるから何か拜まずにハ居られないと說いてありましたモーそふすると直に私ハ何も拜まずとも差支ハ無いと申了簡が浮んで參りましたが夫でハ一も二もないと存じ先づ辛抱して讀んで行きますと抑も禮拜ある者は敬慕の意より起る者にて人若し何物ありとも之を敬慕する時は之を禮拜して其性質に倣はんとするよ至るは自然の人情なり左れバ手本とも成すべき禮拜の目的物が泥や木にて造られたる資性不完全なる偶像よては甚不都合には無之や故に苟も万物の靈たる我々人類が禮拜せんとする者は即ち完全無缺慈愛無量なる天地萬物の造り主たる眞神の外は他に一物も有之間敷云々と說き始めて有りました左れども此れ丈けの事では中々以て得心が出來ませんでしたが追々進んで無神論者に有神の證據を懇々說明致す一段に至りましては餘程理屈も綿密でありましたから是には大分感心いたしました一躰私共も神とこそ申しませんが靈妙不思議な一種の自然力が此宇宙間に存在して居りまして万物を創造し且之を發育致します事は以前より固く承知いたして居りまして何んとなく氣には掛つて居りました又是迄世の中の學者連中が如何程込み入りたる議論をしても此自然力の出處の取調方に至り升とギックリ詰つて何れも不滿足なる辨論を以て遁ひ拂を濟ませる樣に見えました然るに若し此場合に於て宗教上から慥に神ありと見定めが付きました日には夫こそ一切何ものも神の力と極める事が出來ますから如何なる六ヶ敷き問題もスラ〳〵滯りなく分つて仕舞ふに相違ありません其有樣を譬へましたらトント廣大至極に込み入りたる蒸氣機械へ一ど吹きの蒸氣が吹き入るや否や有るとあらゆる諸道具が隅から隅までガッタ〳〵ト運轉し始める樣な鹽梅でありましよふ然るにその一切を神の力と極めるには唯神ありと信ずる斗りでなく神は全知全能なる者形なくして何處にもいまさゞる所なき者慈愛に富める者潔白にして正直なる者などゝ云ふ神の性質は申よ不及聖書の默示即ち神が預言者なる者を通して我々に示されたる法律訓誨其他の託宣其孰れも異論なく信用致さねば

矢張り種々の疑惑もスラく氷解する場合には決して參りません故聖書で最も肝心と申所の奇蹟即ち理外の理が何分にも邪魔に成りまして右の疑惑も氷も之が爲めに中々信用致す譯に行きませんでした折其邪魔と成り升奇蹟の事に付きても右の書物に段々合點の行くように應じてありましたが其内で一番成程尤だと感じましたは我々動ともすると神の行ひ給ふ奇蹟の事に付き是は理屈に合はぬとか彼は奇怪千万だとか申して果ては無神論の極端に走る者あれども是は畢竟我々動物と等しい位に夫々の區域有る事を承知不致より起りたる誤りと申事なり其次第は凡そ此天地間に動作を爲す者何万種あるも之を大別すれば人類と其他の動物の二種に外ならざるべし而て其動作の範圍を三段に分ち下段を動物の範圍と定め此内には鳥獸蟲魚一切の動物を包含し夫より中段を人類の動作範圍とし上段を即ち神の區域と定めたる所で扨て下段なる動物より中段なる人類の動作を觀察したらんには必ずや事々物々鳥獸等の眼には奇怪や極不條理千万なる者ならん既に同じ人類の内ですら文明人の蒸氣電信の作用を野蠻人が始めて見た時は魔法だと思つた事は珍らしからぬ話である位然るに右鳥獸等の怪しとする事物を人類の範圍内に立ち入り夫々取調ぶる時は孰れも理屈に叶ひ筋道に合ひ少しも不思怪なり夫より順繰りに此度は中段の人類より上段を望んで神の動作を觀ひたらば如何あるべきや即ち此處が邪魔に成るべき奇蹟の顯はるゝ場合にして事々物々我等の眼に不條理至極と見ゆる所なり故に是は尤千万なる次第にして如何程似て居ても猿は猿にして万物の靈たる人間の擧動の彼等に別るべき筈なし夫と同樣如何程文明開化の學者連中でも根が五官の助けを假らざれば何事も逆知する能はざる不完全極まる人類の身を以て全智全能ある神の動作を一々人間界の理屈に合はして測り知るべき謂はれなし然るに其不理屈なる奇蹟も若し一歩を進めて神の動作の範圍内に踏み入り取調べたらんにはかの鳥獸等の奇とする人間の動作が奇ならざると同樣神の所謂奇蹟なる者も神の區域内に於ては孰れも理屈に協ひて更に奇とする者あかるべし云々と說てありました元より根が無形の事柄故議論を始めた日には際限は有りませんが私には此說が至極理屈に合つて尤千万に聞えましたから夫よりあれやこれやの書物に引合はせて勘考しました處始めて人智は神力を測るに不足と申事が判然合點が行きました其合點と同時に再び聖書を手に取る氣に成りまして夫からは是迄邪魔になりました奇蹟が近々目に障らなく成りまして遂には此奇蹟があるので聖書の靈書たる所以を發明する樣に成りました併し此發明は余程後日の事で中々急には左樣參りませんでした。

慈善事業に對する婦人の心得

（其二）

スピンチル氏述　三竝頁氏譯

又多くの貧民を集めて種々なる物を與へるのは最も必要なる事であるが、併し是れ等の者に物を與へるにも一人毎に與へるが宜しいか、或は貧人に些少の金を出させて極く安直く賣つて遣るが宜しいかと云ふに、極貧にして一文も金の無い者、即ち飢餓に迫つて仕方の無いものには只與へても宜しいが、其他の貧民には品物を極く低廉くして賣つて遣るとか、或は半價にするとかして買ひ取らせる事が必要である。或は又然うしなければ貧乏人と云ふ者は一時に金を出す事が出來ないから、月賦とか年賦とか云ふ樣にして、成る可く自分の金で買はせる方が宜しいから、斯う云ふ法方を以て事を仕なければなりません。

又此の慈善事業をするに就て金が足り無くなる樣な場合も御座いませう。或は又自身にて金が無くても慈善の目的の爲めに何か盡し度いと云ふ人も御座いませうが、然う云ふ時にはドウ仕たら宜しいかと云へば、是れは少し人々が注意すれば、極めて目に立たないで出來る法方がありまする。其れは如何なる法方であるかと云ふに、是れは役に立たぬと思ふ物でも、其人の注意次第では其れが大變に役に立つ樣になつて來る、所謂廢物利用と云ふ事であります。一體世間の人は衣服が破れる樣になれば直きに棄てる、或は小さな布でまだ丈夫な者でも之を其儘にして仕舞うと云ふ樣な事があるが、其れ等の事は注意して仕ない樣にするが宜しい。破れた衣服や小さな布でも能く注意して集めて置けば役に立ちます。即ち小さな布でも汚れた衣物でも能く洗つて縫ひ合せる樣にすれば、復た一つ丈夫の衣物が出來るに相違無いから、其れを貧民に與へるのも宜しい事で御座いまする、而して貧民に與へる物は奇麗で無く共宜しい、假令古るい物を遣ても宜しいが、古るい物を遣るにしても新らしき時に宜かつた物は種々の裝飾があるかも知れないが、若し裝飾があるならば其れを取つて仕舞つて遣るが宜しい。貧民に裝飾の附いた物を遣つて之を衣れば、人に貰らつた事が解かるから幾分か耻さするに相違ない。故に是れ等の事も注意仕なければならんので御座いまする。今申した如く役に立たぬと思ふた物でも、注意して取つて置けば、其物からして立派に且つ丈夫なる品が出來る而已ならず、娘を教育するには宜しき所の法である。則ち娘が幼少なる時から斯樣なる事を見て居れば、決して物を麁末にする事は出來ない、少しの布でも又は糸でも棄てゝはならん、之を取つて置けば後に役に立つと云ふ事を知る樣になるから、知らず識らずの中に節儉を教へて物を麁末に仕ない心を養成すると同じ結果を得る譯であるから是れは眞に宜い法方で御座いまする。

又木綿の切れとか麻の切れとか又はフランネルの切れとか云ふ樣な物でも、棄てずに取つて置かなければならん。而して此の布の中から二寸より六寸位の巾の物を長く縫ひ合しては置いて病院抔に遣れば、其れが大變に役に立ちまする、病院では是れ等の物が大變に必要であつて、時としては不足を生ずる事があるから、斯う云ふ物を遣れば矢張り病人を助けると同じ樣な事で御座いまする、就中貧民病院抔では斯う云ふ物を貰らへば、ドの位喜ぶか知れません。是れ等の事は些少な事の樣であるが、併し慈善には極めて必要で御座いまする。

其れから又種々なる色の布、即ち赤、青、黄、紫等の小さき布があつた時には、其れを蒐めて置いて縫ひ合せれば衣服、布團の如き物を造へ事も出來る。故に小さき物と云へ共之を棄てずに置けば、意外なる必要の物が出來るのでありまする。或は斯樣な小布を以て病人抔の頸卷きを造つて之を與へれば、冬の寒ひ時でも病人が煖にして居る事が出來ませう、……、又紙の如き物がアチラコチラに飛んで居るのを、其儘にして置けば、遂には反古籠に這入つて仕舞うが、併し其の中から奇麗な物は集めて置いて小さく切り、ソシテ其れで種々なる形ちを拵へた物に色々の布を被せれば宜しき枕が出來る。夏の時は人の頭が熱くなる者であるから、紙の切つたのが心に這入つて居る枕をするが宜しい。斯う云ふ枕は極めて涼しき物であるから、之を病人に遣れば必ず喜ぶで御座いませう、何事にも斯く考へて注意するならば、非常なる慈善が出來る樣になります。而して多くの人の中には思ふ事も無く又爲す事も無く茫然として日月を消費する樣な者がありますが、然う云ふ事は惡るいから、能く注意して何か他人の爲めにする事は無いであらうかと云ふ事を平生から考へて居らなければならん、況して婦人會の如き者を立てゝ他の人の爲めに働らかんとする人々は、無益に日を暮す樣な事があつてはなりません。婦人會の如く慈善事業を以て旨とする者は、他の人を喜ばしむる即ち飢へたる者は其れに依つて飢を凌ぎ、餓へたる者は其れを賴んで以て食を得ると云

ふ様にするには、少しの時日でも注意して無益に仕ないのが必要で御座いまする。

今迄は專ら病人の衣服の事に就て御話致しましたが、是より食物を以て他の人を救ふと云ふ事の御話を致しまする。

食物を以て貧民を救助する事は宜しい事で、既に西洋の如きも斯う云ふ方法を爲して居ります。其方法は一つの區の中に一軒の家屋を借り。而して其處を貧民に食物を與へる場處として置くのである。西洋ではスープの様に製へてある物があつて、其れを貧民に與へるのである、而して其與へ方は一椀とか二椀とか云ふ様にして與へるのでありまする。又其れを與へるのは誰れがするかと云へば婦人會の人々が其處に出張し豫め時刻を極めて貧民に施すのであるが、併し極貧の者を除くの外は大概の者には無銭では遣りません、本價で賣つて遣るか或はセツト低廉く賣るとかするのでありますが、其れでも貧民は大變に喜びます。而して貧民を救助するには冬の寒い時は殊更が酷いから、多くは此の時に於て之を致しまする又其婦人會の人々にして、子供のある者は其處に伴れて來て自分と共に仕事をさせる、斯く仕事をさせれば其子供は教へずして善き習慣が附くのである則ち貧民を救助する精神が幼少の時から浸み渡る様になりまするから、成長しても善き人となる事が出來るので御座いまする。

私も其の側に居つた時には、然う云ふ教育を受けましたが、子供の時に然う云ふ事をするのは面白き而已ならず、貧民を愛するの念も起つて來た事で御座いまする。

今御話した様な法は欧羅巴に在りますが、日本にはドウであるか……、私の考に據れば同じ慈善をする中にも、斯う云ふ法方を用ゐれば左程金が入らないで出來る事であるから、ドウか此の眞似をして遣る様に仕たならば、餘程利益になろうと思ひます。而して此の東京は區が分つて居るから、各區毎に家屋を借て遣つたらば、貧民救助に就て便利であらうと思ひます。

又此の他に病人の爲めにする事も御座いまするが、其れはドウ云ふ事をするかと云へば、看病の事は是れは其方の區域に關する事であるし、又此事を委しく云へば自分から御話しの順も替らなければならんから、此の事に就て今日は別に御話をし仕ないが、若し婦人會にして貧民を救ふの外に病人の爲めに慈善を仕度いと云ふ精神があれば、新聞、雜誌其他書物の如き物に、誰れでも見て仕舞へば其儘捨てゝ置く者であるから、其れを集めて（風俗を害する如き物は婦人會の職さして之を捨てなければならんが）、貧民病院に遣れば固より病人は床に而已居つて別に樂もない者であるから、之を遣れば大變に喜ぶに相違無い、然うすれば一方に於ては棄てる物が役に立つと同時に、他の一方に於ては病人を樂しましむる事が出來るから是れは誠に宜しい法方でありまする。或は又色の紙や繪の描いた紙の如き物があつたならば、其れを小さく切つて本を拵へた物に張り附けて、其繪が彩色の描いてある物なれば、此處はドコの景だとか、或は又動物の圖なれば是れは何の獸だとか云ふ事を書き附けて、而して之を病院に遣れば小供の病人が見て喜ぶでありませう。則ち人を喜ばしむるのであるから、一つの慈善でありまする。

斯くの如く婦人會に於て爲す所の事業は種々あつて、而かも皆有益なる者でありまする。其他此の會員の爲すべき事は時々貧人の家を見舞つて歩るく事である。而して之をするには一人の者を定めて置いてする事もあらう、若し其れが不都合なれば、婦人會より金を出して人を雇ひ之を爲さしむる事もあらう。或は又有志家がする事もあらうが、兎に角此の會から貧人の家を見廻はる事である。而して貧人の家は多くは何事も不順序であるから、會より見廻はる毎に其の貧窮の有様を見る計りでなく、家事の順序を立てる事を教へて遣らなければならん、其家に往つた時に若し勝手な事抔を云ふ者があつたならば、其れを謂はぬ様に教へて遣らなければならん、或は子供があれば之を育だてる事も教へて遣らなければならん。之をするのは最初は極めて六ケ敷いであらうが堪忍に堪忍を加えて之を仕たならば、遂には汚れたる貧人の家も新らしく成つた様な感じを起すに至る様になるでありませう。而して貧人と云ふ者は常に生計に苦しんで居るから、衛生の事も知らず小供を育てる事も知らぬ者が多いが、然う云ふ人には衛生の事を教へて不潔の爲めに病氣を起さぬ様に注意して遣らなければならん。斯う云ふ様にすれば單に金錢或は衣服即ち身體に使う物を與へて慈善をなす計りで無く、貧人の心をなして慈善の爲めに活からしむる事が出來る様になるでありませう。若し一度貧人の精神が潔くなれば粗暴な事も正しくなり、不順序の事も順序宜くなる、結局其家が新らしくなつて今まで其れが爲めに不都合を生じて他人に救はれて居つた様な人も、遂には自活して救助を受けぬ様になるかも知れません。故に此の事業は婦人會に於ては最も必要にして且つ有益なる事で御座いまする。若し斯う

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

云ふ風にして貧民が救はれて來れば、其者は必ず婦人會の恩に感じて或は其者も亦社會を益する樣になるであらうと私は考へて居りまする。

私はモウ此の外に御話しはありませんが、爰に一言致さなければならんのは、貴婦人方が此の炎熱焚くが如くなるにも拘はらず、今日此處に來會つて私の話しを御聽き下さつた事を深く謝するので御座いまする。併し私は今此處で云つた事が無効にならない樣に、貴婦人方に對して望む事である、或は此處に御出になる御方の中にも、今聽いた話しは宜しい事である、實にアヽ云ふ事は宜しいが、併し自分には之を遣るのは六ヅケ敷いと考へて居る樣な人があるかも知れないが、乍併是れは決して六ヅケ敷い事は無いのである。若し貧民を哀れである、困窮なる者は氣の毒であると云ふ精神があるならば、ドウしても之を傍觀して居る事は出來ぬ、必らず何か事業を爲して是れ等の困窮なる者、即ち衣食の爲めに泣き、病の爲めに臥して而かも藥を飲む事も出來ない者を見棄てヽ置くには忍びません。若し人間が天より稟けたる性質と感情とを失はないならば、貧人の爲めに手を下して事業を爲し之を救ふ事を仕なければなりません。併し私が斯く申せば或は同志の者が無ければ出來ないと云ふ人があるかも知れない、けれ共二、三人の有志者が寄れば必出來る事であります。而して二、三人が熱心になつて慈善の事に盡力すれば或は他の人の贊成を得る事もありませう。兎に角熱心に盡力すれば詰り其事も汎くなり、其業も大きくなる譯だから、初より同志者の無い事を憂ず假令二、三人でも熱心に遣ると云ふ事が必要である。現に此の事は吾々が歐羅巴に於て經驗して居るので、僅か三人で慈善の事を始めて遂に大きくなつた事は珍らしからぬので御座いまする。其れ故に貴婦人方も熱心に之を爲されたるならば、獨り貧民の爲而已ならず、日本國の爲めに宜しいと思ひまする、若し婦人にして愛國心があるならば、己れが兄弟同胞の悲しむべき境遇に陷るを見て、之を救ふ事を思はない者がありませう乎、決して慈善を好まない人は無いでありませう。而して之を救ふと云ふは實に其國の洪益でありまして、即ち其愛國心を働らかせるので御座いまする。故に私は漸々に斯う云ふ事業が起る樣に、此處（壹岐殿坂教會）斗りでは無い、種々な處で此の事に關する話しを仕た事がありますが、ドウか各處に斯う云ふ會が起つて、貧困に苦しんで居る者が一日も速く助かる樣に望んで居りまする。

批評

トルストイ伯

撫象子

懷疑と、ダイナマイトと、毒藥と、不平と、逸樂とを以て充滿せる幽暗の魯士亞國に、近世一の大光明を發てる偉人あり、之を伯トルストイと云ふ。日本評論の記者之を我が文壇に紹介し、且つ其の麗秀の筆を以て彼が最美の處ろを明々寫了したり、其功少なしとせず、吾人は今の日本文學を懷ふ毎に常に此流の人の感化、現ちこに顯れんことを熱望す。此文は即はち伯を導くの第一破壁なり、願くは其の告白も、其の宗教論も、其のアンナ、カレンナも續々として尚は吾國の文壇に出現し來らんことを。特に伯が慢遊榮華に耽りて尚は安きを得ず遂に一條の靈光を認ためて俄然悔化するの變遷は、今の年少文士を教ゆる至強至大なるものなり、今ま多少の名ある人誰か左の如き言語を吐き得るものあらんや、

文人詩客は世に教ゆと思へり而して彼何を知りて教ゆる乎、實に美術士となり詩人となり居りたる吾れ明らかに告白す、余は書きたり、亦教へたり、左れど自ら何事たるかを知らず、然し乍ら其書きし處ろ教へし處ろに報いを得、名

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

擧も、家も、婦人も、交際も、皆之を自由に得たり、左れど何の効もなし。

撰擧權を剝奪すべし

「日本」は其慷慨物々の筆を以て、貸坐敷營業者の撰擧權を剝奪すべきとを痛論せり、見よ、某の如きは府會に於てすら德義上安んじて着席すると能はず、自から退動したる程の人物にあらずや、而して彼れ群馬縣下貸坐敷營業者の助力に據りて撰ばれんとしつゝあるが、幸にして失敗挫倒せり、然るに此度び嚴そかなる斯の靈殿の下に於て亦又同樣の手段により遂に議員となれり、此他大坂に於ても同樣の事あり、名古屋に於ても同類の事あり、其他到る處ろに彼の不德營業者が彼此たくらみたる跡甚多し、忌はしき限りにあらずや、畢竟此れ彼等に撰擧權あるが故なるを以て、吾黨は先づ此を剝奪するとに熱鞄盡力せずんばある可らず、此點に於ては總べての廢娼論者悉とく同意なり、「日本」は云く、

夫れ無耻にして德義の何物たるを知らざる者は何の至らざる所かあらん此點に於ては彼の公權を剝奪せられたる者賭博を稼したる者と何ぞ撰ばん、若し彼等をして獨り議員を撰ばしめんか、其眼中既に廉耻なし又名譽なし、又德義なし、爲んぞ能く廉耻あり名譽あり德義あるの人を撰ぶを得んや、議員にして名譽なく德義なく廉耻なく其國政に參議するの資格爲くに在るや、彼等の撰擧に於ては賄賂も寄托も容易に行はるべきこと理の應に然るべきものなり、彼等の代表人は縱令國爭國風の如何を顧みざるが如き議論をなすも理の應に然るべきものなり、彼等は縱令財產上に於て資格を有するも其精神上德義の點に就ては博徒及瘋癲白痴の類と何の分つ所かある、議院は縱令道德の教會ならざるも其立法議政の職分上道德の原素を要することは猶は其智識を要するが如し、吾輩は獨り法律上より之を排擊するのみならず、亦政治上より之を驅除するものなり。

歸朝后感慨

豐田芙雄君歸朝后感慨の記に云く、洋行中は僅に女學雜誌其他數種の新誌を見るに過ぎずして、精はしく事情は知らざりしが、淺間しき不稽の流說しきりに女界に傳播し之が爲めに女子敎育の上に大ひなる荼毒を流せしとを慨す云々又云ふ、

其は素些々たる出來事より前後の顧みもなく唯囂すしく言のゝしりしものならんと識者は疾く看破せし所なるべけれど、夫が爲女子社會の体面にいと大なる耻辱を負はしめたる事鮮からずと云可し。豈啻に恥辱を負はしめたるのみにて止まらんや、世の父母をして最愛の女子を敎育する方向に畏懼の念を懷かしめ、女子も亦隨て熱心に修學する事を憚り、空しく志を腐らしあるものありとかきゝぬ。此は所謂羹に懲りて膾を吹くの類なるに此を以て女子敎育のありさまをト定し自然其敎育の不熱心を來すは畢竟父母其女子に對するいと冷淡なりと謂可し。况して此節の女子は未だ確實なる思想も備はらざるに於ておや。現時の吾國は昔日鎖港の吾國にあらず萬國と相對峙せんとするの今日なり。豈徒らに卑近の學術淺薄技藝のみにて滿足するの秋ならんや。能強健なる躰軀を養ひ、確實不撓なる精神を備へ、學術を應用して能家事を整理し、懇切周到以て能く社交を爲し、職業を勉む者は能之を勵み、以て此個人よりして國家の基礎を鞏固になさん事を期せざる可らず。苟然らずして徒らに皮想而已を事とし足れりとなし、身躰と腦力との運動もなく毎に投車代の存する所を知らず、其結果は遂に生るゝ子女をして薄弱疾病の如き獸を發せしむるに至らんとす。嗚呼斯の如くにして國家の將來を如何せん乎。女子の父母たる者女子敎育者たるもの夫之を雲烟過眼視して可ならん哉。

洋行歸朝の士常に慷慨多し、ひとり之を女流に於て欠くことを頗ぶる歎くべきものあり、然るに今ま芙雄女史に於て之を見る、志あるものゝ女史に求る所ろ淺からずと云ふべし、希はくは同性の爲めに努力せよ。

雜録

家有る后ち一年の感

妻を定め、家を持ち、全一年の經驗を爲したる者の、自白に云へらく、樂しき哉ホームの樂しみ、久しく其論を聽きて未だ其味ひを味はず、蓋し味はざるものは未だ其樂しみを察了すると能はざるもの也。莊子云く、道の虧る所以は愛の成る所以なりと、最とも愛する者は深く偏するものか、之れ果た至言と云ふ可からず、左れどわれ妻を愛するとの切なるにより、他の愛者幾分を失へり、曩に親しかりし數十人は失せて唯だ一つの最愛者を殘せり。否な彼等を失なひしにはあらざるべし、此を得て眞の愛を味はひ知り、則はち初めに親しかりしと思ひしもの、實は親しきに非ざりしとを悟りし歟、譬へば堂に入て至樂に接す、前のいさゝかの樂みは則ち樂みに非ざるを知が如し、われ之を棄に非ず、一段を進みたる耳。左れどわれは總じて愛を減じたるにあらず、寧しろ大ひに之を増したるなり、經に云く、神其獨子を殺し玉ふ、われら此によりて愛と云へるとを知れりと、われは亦た妻の身を獻げて余を愛するにより、初めて愛の眞性を知れり、昔しわれの

愛を言ふや愛はわが議論の袋の中に在りき、今まわれの愛を言ふものは實にわが胸中にあり、われ既に愛の徳至妙至靈なるを知れり、則はち發して之を万事に適用せんことを欲す、愛なくば千言万語ひゃく錢に似たり、亦た何の効かあらん、われは妻の愛によりて救はれしものなり、聖められしもの也、高められしもの也。

既に愛に接してよりわが哲學俄然として一變せり、愛は虚しきものにあらず、實に實在の情なり、西行何如に之を嘲けるとも、われはわが愛情の假僞あることを信ずる能はず、われ確かに愛し、妻も眞實に愛す、而して愛は總べての議論解釋を要せずして確かに余と妻との二つの靈を和同結合したり、あゝ愛は實在のものなり、而して愛は久しきにつゞくものなり、此愛蜉蝣の世に存らへ、殤子の如く夭死するものとせば、吾等が今の樂しきは寧しろ苦しきものなり、天道われ等を苦しませんが爲めに吾等に樂しみを與ふることあけん、余は信ず眞の愛は則はち永久につゞくもの也、而して愛ある魂は永遠に存らふるもの也と。

斯て天地の觀昔日の如くならず、世を厭ふの念毫しだに無し、人は懷疑說を唱へて自から高しとすれど、誰か眞の愛の樂しみに居るとき之を疑はしとせんや、二躰これ一身にして二心万世に逆らふ所ろなし、和らぎて固く、愛して斷ず、われらは永久に如此く同行すと、於此乎何のいとまありて老莊及び幾多のスケプチストに從ふを得ん。

妻ある耳すでに如此し、若し子あらば更に何如ん、あゝ天の人に家を與ふると、父母兄弟を與ふると、最后に妻を與へ子を與ふると、夫れ何等の惠みぞ、彼の世亂れ信仰消ゆるものは、一に唯だホームの光とぼしきが故なりけらし。

富國の基ひ家政科の教授に在り

石翁

金持は一毛一厘をも大切にす、ゆえに金持となるあり、車屋は一町半町の近きをも求とむ、ゆえに長く走るなり、總じて小さき處ろに注意せざれば大ひある事出來ず、大ひなる事は突然頓忽に大ひなるものとあれるにはわらざる也、所云る小さきもの積もり／＼て遂に大きくなれるものなり。

故に富を致さんには先づ儉約することを第一とす、金を儉約するが故に、万事を儉約し、万事を儉約するが故に何事にも粗率あく、遂に大ひなる富を致すあり、左れば國家を富ますの第一着手は儉約にして、儉約の第一着手は身の廻りと家政とを

儉約するにあり、而して此等第一の儉約を爲すの務めは、先づ婦人女子の責任にてある也。

日本の戸數八百万あり、此の一軒々々にて日に一錢づゝ儉約すとすれば月に八万圓あり、若し二錢づゝ儉約すとすれば倍して十六万圓となるべし、然るに一錢二錢の儉約を行ふは手を反へすよりも易し、車に乘るもの先づ一二町歩るきて后ち乘れば乍まち一二錢を減ず、若し全く乘らざれば既に十錢廿錢は助かるなり、竈に燃すに少し注意すれば薪一本は減るべし、朝早く起れば日に二三時間はもうかり、仕事も余計に出來べし、而して夜早く眠れば油の入費も少なからず減ずべし、料理も仕樣によりて甘くなり必らず善き品を用ひずとも濟み直ちに其利得あり、自分にて働らけば下婢一人は省け月に五六圓は少なくなり、衣服の手入鄭寧なれば三年もつものは五年もつべし、均らして月に一二圓は助かるべし、家を樂しくすれば良人は外出せず無益のヲゴリも減ずべし、手製にて菓子を造れば子供の御褒美を買はずして濟むべし、此等の金月々莫大ならん、髮も持ち樣ゆひ樣にて入費に増減多く、紙筆のつかひ方、一切の雜費、心がけにて非常の多少を爲す、斯る万事に於て儉約の心あるとなきは驚ろくべきの相違にして、上等の家に於ては之が爲め月に三四百圓の差を生じ、中等の家に於ては四五十圓の差を生じ、並々の家にては四五圓の差を生じ、極貧の家にても五六錢十錢位ひの相違はあるべし。故に之を平均し極々の下を積もり一軒毎に月に一圓の儉約を爲したるとするも全國にて月に八百万圓なり、若し二圓づゝとすれば千六百万圓なり、更に三圓とすれば二千四百万圓なり。扨て日本中の官立諸學校の入費は年に百万圓あるが故に日本中戸々の細君つとめて儉約する時は、其あまり丈を以て此上八培乃至二十四培の官立學校を支ゆるとを得る也。

故に家政の事を學ぶは婦女子一身に取りて大切なるのみならず、一家及び全國に取りて無上切要のとなり、女學校にて此科を大切とする考へ一層進みなんとは云ふ迄もなく、自から任じて家政科を一つの專門となし之が教授に一生を委ぬる人の起らんと更に願はし。獨逸などにては追々此事に注意する人起れり、我國にても速かに其人の出でんとを見佇だてゝ望むと云ふ。

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身一つは元の身にして。

月さゆる氷の上にあられふり心くだくるたま川のさと。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

夜更けの星

かすみ

世の治亂

天氣と同じあるものぞ晴かゝりたる時は少々降り相にても降らぬものぞ降りかゝりたる時は晴そうにても降るものなり治まり懸りたる時は亂るゝ如くの儀在之候ても治まり亂れかゝりたる時は治まる如くに見へ候ても亂るゝものなり（徳川家康の語、駿河土産）

天然の書齋

クラップ、ロビンソン記す、或る日旅する人チイヅチルスの書齋を見んとて尋ね來りぬ、下婢一室を指ざして云く此こそ主人の書籍室にはべる、されど日に／＼學び玉へる處ろは彼處の野面にて候。

農家の至樂

田舍の紳士何を苦しみて議會の煩わしきに出んとを望むや放翁うそふきて吟ず、其警に云く、

野人無二曆日一。鳥啼知二四時一。二月聞二子規一。春耕不レ可レ遲。
三月聞二黄鸝一。幼婦閔二蠶飢一。四月鳴二布穀一。家々蠶上レ簇。
五月鳴二鴉舅一。苗稚憂二草茂一。人言農家苦。望レ晴復望レ雨。
樂處誰得レ知。生不レ識二官府一。葛衫麥飯有二即休一。湖橋小弄酒如レ油。夜々扶歸常爛醉。不レ怕行逢二灞陵尉一。

物あらそひ

むかし奈良の都の御時、雲の上にて樣々の物あらそひありけり其音すさまじきにもあらず、最と／＼優に聞えける、

月の夜と雪の朝たと

ふる雪はつもらぬ影もあり明の月ぞくまなき秋の山さと

しぐれと松風と

別れ尙おわれあらじを松風のしぐれの音に通はざりせば

風に波よる柳と露にしほるすゝきと

青柳のかげふむ道に休らはん招くすゝきは左もあらば在れ

うきまるゝ身とおかぬ別れと

憂る身は憂になぐさむ方もありおかぬ別れの道ぞ悲しき

「君一寸と見給へあの人を實に今日迄幾人の涙をぬぐつたか分からないぜ」「ソーカテ人は見かけによらぬものだきたるらしひじひさんだが大層信切あえらい人と見える一體何と云ふ先生かれ」「あれかあれはハンケチの製造家ダーネ」

ある紳士が畫師の元を訪ふて「私の父の肖像を願ひ度ものですが如何デショー十年程前に死んだノデス」「ヘーしかし御面の具合をよく承知いたし度ものですが」紳士は不審顏で「デもあなたわ神武天皇樣の肖像を御かきなすつたと云ふではないか二千年前の人をかく方なれば十年前に死た人の顏はよく御存じの筈だが」

人殺ろし

みどり

一二年來忌わしき知らせ毎度新聞紙上に見はる。即はち殘酷にして聞くだに得堪へざる人殺しの報道を見る是れ也、わが同胞倘ほ斯く迄に野蠻なるか、心若しき限りと云ふべし。因りて思ふに、是れ一つは封建の餘習人を殺すことを物の數とも思はざりし遺傳に出づ、又の一つは死刑たびく行はれて殺人と云ふとを天理に逆らふ至大なるものと得悟らざるが故なるべし。凡そ殺人罪を犯せしものを殺すは、異日かろくしく人を殺すとを制するの効もありと云へど、左りとて亦法律によりて人の生命を滅すと云ふとを目擊するにより、之が爲め反つて人の生命を重んぜざるの氣風を生じ、引いて殺人罪を犯すものを增加するの毒あり。此二つは好く考へ細かに慮ばかりて深く其比較を勘定する所ろなかる可らず。未だ一日にして直ちに死刑を廢すると能はずと云へども、年と共に追く之を廢する方に進め、之を廢するとによりて濫りに人を殺さんとする者の起らざるやう取締るの手心も大切なるが、同時に亦た一方に於て人の生命を尊とむの氣風を養生せずんばある可らず、之れ仁人君子の今より深く考慮を置くべきの事件ありとす。

ソロン、ブライト云く、

世界中大國にてあれ小國にてあれ凡そ死刑を廢して之が爲めに人命を危くしたる國一つもあることなし、人は云く死刑を置くときは人をして他を殺すことを制せしむと、然れども堂々法律によりて人を殺すことを制定す、此制定の人をして殺人罪を輕視せしむるの影響豈に淺からんや。

難める人の爲に勵む

もみぢ

哀れなる人を見て屢は嗟歎するとあり、彼の老ひたるもの重きを負ひ愴踉として行く、われ車を驅りて疾走すると何の勝る所ろあるに因る乎、此頃のあつさ得も言われず狹き屋に溢居して而も餓る人の苦しさ何如計りぞや、然るにわれ飽く計りに飮食し陶然椅子に憑りて眠るなど、覺悟し來ると共に愕然自からの幸福に恐懼せずと云ふとなし。嗚呼、われ何の功ありて斯く安樂し、彼の困する人何の不德ありて彼の如くに困しむぞや、思ひ至る毎に坐ろに恐ろし。たゞわが盡し得る丈けを盡し、わが儉約し得る丈けを節し、一切の餘れるは擧て善事に用ひなんと、唯一つの慰さめなり。

行く水と過ぐる齢ひと散る花と孰れ待ててふ言を聞かまし。

靜女塾主、小尾みつ子女史を訪ふ（二）

生野ふみ

妹問らく女史は、
靜女塾設立以前にも
既に女子教育に從事せられし事ある乎女史曰く否大差は別に女子教育に從事したりといふ程の事もなし只其前に一寸と暫く茨木縣の中學校女子部に於て教授の勞を採りし事ありしも其はほんの一時頼まれて爲し然しといふ位の事なり。妹問らく、女史は始より教育家たらんとの志望を有し居られしにや女史曰く否私が最初の志望は女子教育にてはあらざりし私は始め用術らく我國には今日まで婦人にて隨分畫に巧みなりとか或は書に妙なるものとか云ふはあれ共未だ時文を善くし且は記事に精しく學道に通じたるものはなし故に私は之れ等のものを修めて往に學を需し其を書くものよりも一層級を進み更に書籍出版などを研究する所あらんと欲し其目的には研學を始めたり然れ共父中途にして世に思ふやう時々にもせよ書籍にもせよ之れを業とする時は人の爲に頭存せらるゝは目ち一なるのみ依て私は別に撰ぶ所なかるべからずと斯く思ひ居れる頃恰かも亦此縣何なるものに就きて種々の考を起し來りたるはいかで婦人と雖も此世に立ちて一家を組織し社會の一要素を占め得られぬ事やはあるいで私は先づ其一家を組織するといふ事より始めばやと思ひ立たりしに恰好知己懇意の人々より其頃頻りに娘達の教育を托されたれば遂に是を以て世に立つ事に決心し茲に塾舍を設けて全く女子教育に從事する事とはなりしなり。妹問けらく

女史の郷關

は何れぞや而して何年の頃より東京に來られ又何處に於て何人に就き學ばれしや女史曰く僕は茨城縣下のものなるが東京に來りしは今より十四年前の事なり其前にも一寸東京へ來りたる事ありしも其は子供の時分の事故確とは覺へず始めて學に就きたるは郷里にありし頃の事なれ共眞正の勉學をなしたるは出京以後の事なり全體私は始より餘程人とは異なる勉學方法を採れり故に郷里に在りたる頃も遂に小學校へは行き得ず或人々に就て學びたり東京へ來る折にも他の多くの人々の如く別に學校へ這入て勉強せんなどゝは思はず先づ何人にか就きて教を乞はんと思ひ立ち終に三圓金を懷にして國を出たり斯くて東京へ來りし後も別に頼るべき親族なければ亦知己もなし唯さへ學資金も素よりあることなければ數年間食客のみをして勉強したり一番最初に或人より長三洲先生に紹介を得たれば先づ先生に就きて教を乞ひ居る内之れより夫へと傳手が出來遂に、

四十八人の師に就きて學ぶことを得る身となれりと妹は此はなしをきゝて余り其師の數の多きに一驚を喫したるが更に問らく其は仝時に夫れだけの人に就きて學ばれしにや但又遞次に師を代へられしにや女史曰く仝時に四十八人の師に就き居りしなり但如何にして左樣に多くの師を求めしかといふに私は素より貧生の事なれば別に謝金を出して習ぶといふにも非ず何れも皆篤志にて敎へ呉らるゝ事なれば日毎に行くといふ譯にも行ず且又易は易詩は詩書は書論語は論語孟子は孟子といふ樣に各先生には各得意の書物あるとなれば私は其各先生に就きて其先生が各得意とせらるゝものゝみの講義を聽く事とせり故に毎日〳〵順次に各先生の家を廻り或は一時間或は二時間と所々にて別々に學びしなり幸なる事は其頃は未だ女子の學生といふもの曾てあらざりしかば各先生とも殊に私が志望を賞せられ深切に敎授し呉られたり中には往々小使衣類等を惠み呉られたる人もあり夫れが爲私は左したる困難もなく無事に數年間學窓に在る事を得たりきと妹は怪訝の意未た解けざるも最初より女史が異樣なる勉學法を採れりとの冠詞を置かれたる事を知れば玆ぞ其異樣なる所ならめと匆々に斷定し置き更に又其四十八人の先生の中に就き主なる人々の姓名はと問ひたるに女史云はるゝやう、

四十八人の內何れが主なる先生何れが從なる先生と云ふ事はなし然れ共其內現に生存なし居らるゝ先生にて名ある人々をいへば前申せし長三洲先生の外に西村茂樹先生重野安繹先生等あり是等の人々の門には今も猶出入して其敎を乞ひ居れり。妹問らく是は甚如何なる御尋なれ共妹が參考にもとて御伺ひ申事なるが女史は寢食をも亦順次に各先生の家に就きてなし居られしにや但寢食は一二の家に定め置かれしにや女史曰く其處が又奇妙なる所あり寢食は寢食にて又別に厄介になる所ありしなり初めの二三ヶ年間は宿屋を業とせる家にありて食客となり居りし事あり兎角して無事に數年を送る事を得たりしなり只其內隨分困りたりと思ひたる事は、

文久錢一個と一厘錢一個と都合二厘五毛にて

二ヶ月を支へたる事と又單物の重ね着をして二ヶ冬を越せしとの二事なり其他は左して困難と感じたる程の事もなしと。

妹は此談話中つく〴〵と女史の容姿に注意したるに實に其筋肉のしまり方といひ其骨格の整ひたるなど如何にも幾許の勞働を經來られたものとおぼえた。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

雨ふれば木毎に花は咲にける　いづれを梅とわきておらまし

五月雨にしらぬ細木のながれ来て　おのれとわたす谷のかけはし

おとゝしも去年もかはらで咲く花は　其日ちりきと知る人ぞなき

訪ふ人もなき山里の秋の夜は　月の光もさびしかりけり

きよめ弘庭

其十七

國自慢

酒孫富士人

何れの國人を問はず、己が國の自慢せぬものぞ少き。洋の東に隔れるアメリカなる合衆國に渡り、其が波止場に着くや、迎にとて來れる彼の國の人たち「よく御出になりました」と云へる辭の下より「貴君此の國が御氣に入りましたか」と訊ぬるなる由。そのとき答へし者の、いかにして其答せんすべがあらん、よりて「まだ判りませぬ」と答へたらんに、彼の國人は、いと不興氣なるおもゝちして、辭を他のことにうつすときゝぬ。それよりイギリス國に渡り行けバ、此國人は世界の中にても、最も國自慢の國風あり、己が國のものは、政治法律の類、言語衣食にいたるまで、一として他國よりはすぐれぬものなし、と思へるものから、同じ歐洲の中にありながら、凡そ學術の上のことどもは、政治法律の類より、なべての學文、みな獨逸國、佛蘭西國に、ひたおとりにおとれり、されど今に至るも、なほ國自慢するのくせは、直るべくもあらず、習慣は第二の天性なりと云へる如く、こも苦々しきことなり、さるに我國人にて、專ら英學に便りて、諸々の學文修めたる人の、また前の風に化せられて我國人にありながら、所謂イギリスびいきとも云へるくせつきて、政治法律なにくれのこと、みな英國の如くせんとこゝろがけ、我國人の風習につく可くもあらぬことをそ、無理やりになりともおしつけんとするは如何なりとは云ひがたし。

これらみな己が國を愛ると云ふ心の、片はしなりと云はゞ、いたく責む可きにはあらねど、我國人とても

日本國は萬世一系の天皇のしろしめす國なり、とて國民そがまゝに居張り居らば、いつか宇宙の御威稜をますこととあらん。

日本國は君子國なり、古より忠君愛國の道自然備具るとてすておかバ、いつか消徳のもとにつかむ。

日本國は五風十雨時に順ひ、五穀豐穰の地なりとて、耕さずくさぎらずば、なにとて富める國となるべき。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

日本國は山水明媚、風色絶佳なるとて、そり〳〵に遊ばんとて來る、外國人とともに、遊びくらしなば、人民遊惰となりて、事あるときいかゞはせむ。

日本國は世界に比類なき憲法を、刄に衂らず、罪人一人つくらずして發布し、東の洋の一端に立憲の國建たりとて、心のみ安堵させなば、名のみにて其實を得ることかたからむ。

ひたすらに己が國にのみ慢りたりしも、慢る可きほどの準備常にせざらんには、なにかやくせむ、世に國自慢せんほど心ぐるしきことはあらじな。

大鵬と云ふ鳥、羽うちて蒼穹をかけるときは、その翅のたけ九萬里ありと、莊子が筆さきにしるしたれど、古よりたれ見たりと云ふ者なければ、今は云ひ勝になりぬ。今は昔滊車、滊船どもの便なく、五十里、百里行く者も、水盃してかしまだちせし頃、江戸より京都にのぼりし髯髭の奴、御城内より出で、兩替屋に行き、錢を買ける折から、そが門邊を魚賣人の、鯛鯔鱈など荷ひて、よびつゝ賣り行くありけり。

奴　御亭主此許では、大きい鯛と云へば、どの位ありますナ

亭　されば大きい鯛と申は、一尺七八寸乃至三尺より大きいのはござりませぬ

ときゝて奴大口ひらきて笑ひつゝ

さても京はよろづものごとがちいさい所じや、ときいては居たが、その通じや、御手前は江戸をみやつたカ

亭　まだみませぬ

奴　それなら荏土の話をしやう、江戸で大きい鯛と云へば、先づ一丈四五尺、ちいさいと云ふても六七尺位、いま賣つて通つたやうな、二尺ばかりのは雜魚の中にまざつて居らア

ときに亭主も居たゝぬばかり肚をかゝえて笑ひつゝ

御江戸は萬事大きいところやと申が、どうか一度は下りましたい

と云ふに奴いやが上につのりて、其所なる天秤の上にありし分銅をとりて

此分銅はこゝもとにてはいかほどにつかふゾ

亭　それは二百匁分銅でござる

奴手をうちて笑ひながら

てんとびやくらい此は江戸の二分分銅じや。

＊　＊　＊　＊　＊

小説

うき世 其九　かほる

日の下に人の爲す所盡く空にして風を捕ふるに似たり、富貴は浮める雲の如く、名聲は流るゝ烟にも譬へつべし、之を知らで日々空しき事に孜々營々たるこそ憐れなれ、余が今余の身の上を書き置かんも嗚呼盡く空しかるべし、千歳萬秋の後、寂寞たり身後の事と昔の人の云ひけるは此の理りとぞ知られける、さはいへ余が書き殘さんもの聊かだに人をして悟らしむるあらば余の望みは全たし。

昨夜讀みたりし旅の日記は今より五年昔ものしけるなり、素より人に示すべきにあらねど書きつゞりし文の端に加へ旅かぬ今日も病ひ強からねば少しくものすべし。

學びの道に入りしより、六年の星霜をぞ經たりける、其間に見聞して心に感ずる事あり、イザ少しく記し置かん。

余は都に上りけり、立並らぶ家々多かれど余が立寄るべきはなかりき、行きかふ人繁けれど事問ふべき人はあらざりき、高き所より遠く望めば連なる山々聳ゆれども何れも見馴れぬ姿なりけり、四邊だに得分たず、雲の間にさまよひ、霧の中に迷ふ心地して心細くなりぬ、自ら招きし悲愁とは云へ、亦世のあぢきなき樣、身の幸なき事共忍ばれて轉た異境の露に袖を絞りけり。

余は伯父君の宿所を聞き覺えたりければ先づ其所を訪なひけり、伯父君は余の爲めに兎角計り給ひ、余の父母に文書き送り、其許しを乞ひ給ひぬ、父母は許し給ひけり、余はとある學びの窓に入りぬ。

余は故郷の山間に住馴れて人と交らひし事も少なし、風を知らぬ花、木蔭に生ふるなよ竹、未だ浮世の波風に遭遇せぬ樣にて、いと心弱くありき、されば年長けたりけれども余は幼兒の如き思ひしけり、共に學ばん人は多かれど皆見知らぬ者のみ、相語りて身の憂さを話す友なく、打集ひて徒然を慰むる知己なかりき、天涯の孤客となり思ふ事多かりき。

故郷を戀ふ心は天賦の性なり、利害得失の係はる所ならず、南の海の濱、暑さ堪へ難き所、海洋の孤島にありても住み馴れては戀しくなり、北の國の際、寒さ烈しき邊、氷を家となしても故郷とし思へばいとゞ戀はるとぞ、余も都に住み馴れぬ程は故郷のみ思はれて學びの道も進まざりけり、吹く風寒き冬の夜、暑さ烈しき夏の日、折にふれてはありし昔を忍ばれける、我父母は今は如何暮し給ふらん、兄上は如何あらん、

共に遊びし友人は恙がなきや否や、抔思ひ出でぬ、余は不幸にして家をなつかしとは思はざりけり、さるに斯く故鄕ぞ慕はれける、況して親しき親兄弟あるものは如何に故鄕のなつかしからん。

あづさ弓春としなれば都路は柳櫻にこきまぜて、錦織なす美光佳景、四方より集る人多かりけり、余は獨り居らん事を好み、憂鬱の内に沈みたりければ、暇ある毎に都を立出で、近きわたりの山河を拔涉しけり、山の巓に立ち雲烟茫々の際に故鄕の空を打ながめつ過せし日數も多かりき。

九夏の休みとなれば學びの窓を辭し、許多の學友は家に歸る、余は志遂げずば死すとも歸らじと、自ら心を定て故鄕の空を立出でぬ如何で中途學成らずして歸るべき、されど人情の然らしむる所なりけん、羈旅の鳥舊林を思ひ、池中の魚故淵を慕ふ、余は坐ろに故鄕戀しくなりき、幾多の友人互みに別れを告げ交はし、亦遇ふ時を契り、小車に打乘りサラバと云ひて立出でぬ、余は學の窓より小車の行えを暫しは打ながめ、余も親しき親兄弟あらんには嬉しく歸省すべきに抔思ひ出で悲哀の涙にぞくれたりける、歸りたりとて快樂はなかるべしと思へば更に亦悲く孤窓の下人去りて寂寞たる所に獨り袖を絞りける事も屢々なりき。

余が交際の道に長けたらんには多くの友をも得たるらめ、僻山里の鶯片言葉も語り得ず、人に遇ふて語る事だに知らざりければ余は容易に親しき友を得ざりき、されど一月二月と過です內數人の語り交はす者出で來ぬ。

山に在つて泉水淸く、山を出でゝ泉水濁るとかや、故鄕に在り父母の慈愛を受け、淸き敎育を蒙りける時は小兒の心は直く正しからん、されど靑年の習俗惡しき都に出で、汚風濁習に染みて多くの靑年はよからぬ氣風となる、余が都の風に從はぬとて余を賤しめ譏るも多かりき、余は倩々思ひぬ、都は住み憂き所なりと。

鳴呼余は今此處に記するに堪へず、記せざれば余が生涯の大事を遺すを如何せん、ア、記せんとして兩眼涙に塞る、讀者若涙あらば乞ふ余が爲めにそゝげ、ア、斷腸、余が都に上りける明年秋十月の末つかた、余は例の如く郊外に遊步しけり秋草漸く老ひて木葉紅を帶び、凉風山野を吹き渡り、雲滿天に起りけり、鐘聲は遠く山寺の夕を報じ、雁の音は寒く村雨の空に信づれぬ、余が都に近づきし頃早や日も西山に沒しぬ、牧童の笛の響きに牧牛集り、草村に啼く蟀に虫鳴き初めぬ、

四邊寂寥たりき、余は餘りの淋しさに思はず道を急ぎて校舍に返りぬ、斯く淋しかりし時はなし、常にも似ず、心靜かならず、胸打騒ぎぬ、余は室に入りぬ、テーブルの上に一本の書狀あり、見馴れぬ字にて認めありき、余は開封して讀みぬ、嗚呼父上長逝せられしと報じたり、ア、斷腸。

寄書

避暑地案内（下）

K・M・生

翌午前第九時出發して根本に至る關所は館山より大凡二里餘の所にあり昨年始めて浴客の便に供せんが爲めに養齋院(網院)を設く布良と根本との間の鼻の上にあり戸數僅に數戸に過ぎずと雖ども其位地甚だ高爽にして眺望頗る宜く夏時の避暑には尤も適當の場所なり只海岸は水深く波荒く或は危險の恐れなきにあらず其より大凡一里斗りにして白濱に至る關所は本さは野島と稱して離島なりしが今は地形大地と連續し島の形を存せず此邊は石花菜。石决明。蠑螺の名所にして婦人の出でゝ漁する者頗る多し風景又佳奐にして遙に根本の景色に勝る戸數は殆んど八百斗にして旅館には鍋屋七島など尤も宜し白濱より二里半にして千倉平舘の二村連り其間に温泉あり其質未だ香頁ならざれども亦以て避暑の場に適せり又海水は淺くして水浴に便なれば避暑には頗る可なり戸數は大凡千戸位にして頗る繁住なり旅館は山口春木など尤も宜く特に温泉場は旅店兼業にて其地は高爽宏濶處上より東方を眺むれば東上總の地眼下に見え讖景諸光社席の下に奇を獻じ秀を呈し鹿野山の如き高峯重疊して波濤の一起一伏するが如く東南一帶の海水一大明鏡の形をなし山影之れと相映じて淡妝の美人明鏡に對して璉鬟を梳るが如し其他萬景の勝狀實に筆紙の盡す能はざるものあり余此樓にて午餐を喫せしが會々微風欣ろに吹き來りて何となく心地よく感ぜしかば

そゝろにも磯邊の風の通ひ來て
なつさもしらん松の下庵

と詠じ爲々逍遙して北條に歸り今夏避暑は該地と定め種々の準備を爲したりき時に時針午後五時半を報じぬれば晩餐を命じて草々旅裝して東京行の夜船に乗る午後八時出船し深夜朦朧として月を観ず夢寐の間忽ち東京に着しぬ。

房州地方の風土產物の概畧を陳べんに人民の職業は重もに漁業にして海產物の重もなるものは「サンマ」。鯛。叔鮪。石决明。石花菜等にして一年歳入三百二十一万圓あり又房州砂と稱する磨き砂も有名の產物にて一ヶ月に六貫目一俵のもの五万俵を出し價格三千圓なり此等は該地產物の主なるものにして農產物は甚だ乏く此等の產物に比すれば實に微々たるものなり故に人民は概ね海產事業に從事し其收入を以て米穀等を買ひ其生計を立つ貯金の餘裕あるものは甚だ少く多くは貧しき方なり然れども東京の如き活路に窮して飢餓に號ぶなどの極貧者は一人もあらざるよしなれば先づ該地方人民は大抵幸福の方なり人民の宗教心は至て澹泊なる方にて佛教の如きは舊慣故俗の爲めに行はるゝも基督教は唯に微々たる天主教あるのみ傳道者山口菜氏の盡力にて稍く僅々七八名の信者を出だしたる由但宗教心の薄きも風俗は甚だ惡しき方にはあらず概して質樸の風あり該土の氣候は冬夏共に概當にて殆んど神戸に類する所あり凡そ凌ぎやすきは勿論なれども中に就きて尤も肺腦氣管「リウチス」脚氣病などには頗る適當の眞地なり。人氣は氣候につれて至りて温良にて交り易き方なれども何となく卑野の風あり當地にて名高き人の詠みたる歌なりと云ふを聞くに

「ドーモコーモ、カライツチナイニ、ハナザーリ、ヤーマシーホド、オゴロソガナカ」

これを解けばどこも彼處も一面に花がさいてやかましい程鶯が鳴いて居ると云ふ意味なり

「セーフロデ、トーサギアローヽツイロザシ、センナリフーベー、ヒヤーパーリナル」

水風呂にて鏡鼻鞾を洗ふことが出來る程月が光りて千成りへウタンが百斗も澤山になりて居るとの意味なるべし好風流家の詞藻にても此の通りなれば一般の言語風俗の卑野なる推して知るべし礼節に該地方の人はカキクケコの音が出來ざるやうなり。

費用は所によりて多少の差違あれども概して少なきは一月四圓位多きは七圓五十錢位の間に位せり昨年頃は三圓前後の處物價騰貴の爲めに騰貴せり船賃は當春までは二十五錢なりしが物價騰貴の爲めに四十錢に登れり此の實費の外には一文も費す途なく僅か十五六圓もあれば全き夏を凌ぐことを得て餘程廉價に上がるなるべし。

以上余が實地見聞の事項を筆記して聊か世の避暑を企る各位の案内に供す。

美服人の指さゝんとを患ふ

本所　小池梅謨女

倩ら思へば三十年の昔ならむ、米國の軍艦一隻我が浦賀港へ到着し、三千年の長夢を破覺せし以來、戸々爭ふて歐米の學を唱へ、家々競ふて彼れが風俗に習ふ、

是に於てか洋裝の行はる實に盛なるは妾が最も欣喜に堪ざる所なり、夫れ我が短所を捨てゝ、彼れが長處を取るは、日本特有の美點なるに、我が同胞姉妹は却て米の質素を退けて佛の婚奢を迎ふるに似たり。故に其の裝飾の如き、或は金玉を以てし、或は金剛石を以てす、奢も亦た甚しと云ふべし。姉妹よ、姉妹は美服麗飾して社會を眩惑せんとするか、識らず社會は美服麗飾を眩惑するならん。乞ふ姉妹よ、外形の美を飾りて內部の美を疎缺にする勿れ、蓋し外形の美を粧ふの意は、或は秋天男子の歡を買ひ、見を求むるに過ぎざるなるべし、是れを過言すれば、小心翼々教育不充分なる町家の阿娘に等しかるべし。聞說、黃金の弓は外形甚だ美しく、珠玉の矢は實に麗なりと雖ども、社會てふ戰場に立て功名手柄を顯さんと欲するに何の助太刀をすべきか。聞く名馬は丈尺を云ふに非ず、將た毛美を稱するに非ざるなり。世の同胞姉妹よ、何の思ふ所有てか美服麗飾するや。

開書

女學孃の誕辰を賀す

思君子、菊地敏雄

回顧すれば明治十八年の七月廿日、女學雜誌の初號、社會に分娩せしより以來、金烏玉兎轉一轉、春謙を送り、新春を迎かへて、既に五春秋を經、五裘葛を過ぎぬ、嗚呼最も壯健に、最も清福に、玆に五年の星霜を積みて、將さに六歲の曉を迎へんとす。思君子、始じめ女學孃の幼時、近藤賢三君に鞠育せられし頃より、相交はり、相親しみ、月に兩回、相見ることの如何に樂しかりしよ。其後、巖本善治の君、掌中の珠、頭上の花と愛育せられてより、益其親を厚ふし、愈其愛を深ふし、月に四五回相見ることを得るに至りき。思君が女學孃に於けるの交情、夫れ既に斯くの如し、況んや思君が女學孃の爲めに得たる所、蓋し少なからざるに於てをや、思君子、豈一言の賀辭之れなきを得んや。

女學孃が五回の誕辰を祝賀し併せて既往の愛顧を感謝し將來の壯健清福を熱禱す

嗚呼明治廿三年は是れ如何に樂しきの年ぞや、十四年の大詔以降、首を鶴てゝ待ちたりし帝國議會、正さに本年を以て創開せられ、大博覽會亦開設せらるゝの幸運に接しぬ、而して本年七月は亦如何の幸なるの月ぞや、其頭に於て、衆議院議員の撰擧あり、其尾に於て、大博覽會局を結ぶ、其中間に立つ七月廿日は亦甚だ喜ぶ可きの時ぞかし、經濟雜誌社が懸賞的の懸賞文は、當日を以て〆切らる、思君が最親最愛の女學孃、亦當日を以て生まれたり、嗚呼、樂しき年、幸なる月、喜ぶ可き日に於て、女學孃が第五回の誕辰を迎ふ、豈啻ら樂しく、最も幸に、最も喜ぶ可きのことに非ずや。思君子、欣喜の餘、聊か賀意を表せんが爲めに、茲に潛越を省みず蕪辭を呈す。

文論

みれ子

●神戶K.N.生様　鈴木弘恭先生に伺ひしまゝ左に御答へ申上候弁內侍日記八月十五夜云々「またみるかけのなかろらん」こは引歌なり、此所に古人の歌を引くべきなれども此原歌未だ見あたらず。

三月一日ことうの御神事に云々ことうはごとうと讀むべし、御燈なり三月一日より御神事あるなり、公事根源に三月三日御燈是は天子の北斗に燈明を奉りたまうなりとあり、江次第、中右記一條院御記などにも見えたり北斗星祭なり君の問は鈴木先生に伺ひし所を答ふべし。

●岡山縣英田郡王の舍幸子様　殿はもと敬語なり、三公幷に上達部(四位以上)などをさしていふ詞なり、源氏物にあるおほい殿(大臣也)大納言殿少將殿の類なり然れども又當時目上より目下をさしても又同輩にてもいふは何等の頃よりかくはりしと見えたり、源氏々親卷北ごのこそ開給へ是等は商人の同僚に向つていへる詞なり是より下りて鎌倉足利德川氏に至るも皆然り、たゞ俗には殿と眞字に書く時は目上に對し、との又殿など書く時は目下に對する事となりたるも鎌倉頃よりの事なり委しくは文書等見るて知べし。

此頃發兌の發句の好雜誌澤山ありましよふが別段よきものはありません。

細君は細は万葉などに皆クハシとよめり花細散久樂云々目細乃君云々との類なりクハシとウルハシは同音也、細君と親愛してそれよりいふ意なり古事記に諾尊(夫なり)の冊尊にの玉ふ條に「ウルハシキアガナニモノミコト」とあり、同意なり夫より妻をさして君といふ例萬葉にも多くあり、又支那の妻を細君と呼ぶ中に細ハ小なり、妻君は家に在つて夫に比して小なる故に俗と云ひしとあり。

貴様はもと敬語なり、目上に對すべし、目下に云ふは是も近い如く後世に見えたたるなり、今日下に對しておまへといふも御前なり目上に對して云ふべきを亂れては斯の如くなり來れり、此類の亂れたる詞の遣方は現今尙あり注意し給へ。

●落花生様　英學を獨修の書は理論的のものにも種々ある故必らずしも讀み易からず、小說讀本とてその通りにて或書は俗語あるとても讀み易きものもあるべし何れにしても一年や二年勉強の後では獨修する事難かるべし、然し止むを得ずんば成るべく讀み易きものを撰びて讀み給へ、理論的のものにても小說讀本にても何れにても宜し、亦人の好き嫌ひもある故其順序ハ預め定める事難し。

時事

條約改正

改正條約は漸次々ロンドン、タイムス紙上に出現す。今回の前回に異なる大點は、若干年間居留地内に領事裁判を續け、其間だ外人に土地所有權を與へず、而して若干年の期ち〔なく〕對等の實際となすにあり。是れ一段の進歩なりと云へども此の若干年と云ふとの長き間だには今尚ほ國民の反對あるべし。特に此の前の聞にも最近なれば、今に於て早計に同意せんとするは得策にあらず、總べて外交の問題は輿論の後援を受けずんば力の薄弱なるものなり。

日本人を殺せし罪人

日本人を射殺したる、濟田丸の運轉手ヘードネートは、禁錮五年の刑にて入監中の處ろ、政府の申立てを容れ同國王に於て赦免したりとて過日釋放せられ、水夫に採用せられてシンターパーへ向け解纜したり。今の條約改正にては此等の事に付きても嘆いも詮なきやうなき也。

メソヂスト婦人年會

日本の婦人中耶蘇の教に尤も能く働らくものには若干に至り教徒ならん、而して其教徒の婦人中殊に尤も能く働らくものは明らかにメソヂスト派の婦人なりとす。然るに日本國中に散在せる同派の女傳道師、今や廣島に集會して、年一度の大會を開ふす、其熱心の傳道事蹟の發達ならんことは、万國の共に祈り、万目の共に注視する所なる也。

閨房のさゝやき

閨房の囁やき三千五百圓、之は何にの事ぞ、三千五百圓は固より八百圓よりは少なきなり、されど八百圓は今に於て心ふさ代はりに國の爲めには多くの用を爲すなり、賢夫人たらんものは其良人をして金を貯ふよ爲からしむ可らず、有益なる事に爲すと旨んならしむべき也。

議員上京の折は

一つの心得置るべきとあり、今すでに上京中の住宅を頼み來し、狹くとも二頭立の馬車を容れる程の家を見付くれなど申し來るもありとか、其邊の事は暫らく隨意に任す、但だ是非とも一事を忠告す、即はち議員は成るべく令閨を伴なひて上京せよと。蓋し、二人にて都の見物するは面白さ一層ならん、秘書官として之を同行すれば政務調査に自由多からん、在京中無益の交際を制し入費のかゝり少からん、不埒なる遊びを爲し議場に何事をもなさずして部門に惡風を遺すなどの患ひなけん、特に其夫人と夫人と相連合し、一の交際會を設け、高官者を問はすものを夜樂交せしめ、陰に議員間の調和を計るに至らば、幸福無量と云ふべし。以上多くの効能を悉とく奏し得ずとも、一つ位の益は必ずあるべし、故に之を勸告す。

文明國に野蠻人多し

スタンレーが亞弗利加アルウミ森林内のピクミース族に付きて語れる談話は、ロンドンの心ある人々を驚動したり。佛蘭西全領の半ばよりも廣き土地に三十億本よりも多き大木亭々たり、此處に四尺にも足らざる短矮人が開闢以來何の進歩もなく蠢々群々すと云へば、今の企業心熾なる歐人をして其慾情

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

を烈動せしむるや固より也、於此乎、開化人が野蠻人を征服して之を文明に導びくは天理なりと叫ぶものあり、彼の公明正大なるスペクテートル記者すら尙ほ之に同ずるに至る、ロンドン現今の論客は大率ね此問題を以て傾動するに似たり。嗚呼政治界に德義の及ばざると久し、英人何んぞ何日迄も貪戻にあくとなきや、汝等安んぞ先づ之に傳道師を遣はすの仁心あきや。

佛國に於ける佛徒

現今佛敎の西漸する事頻りなり、當時パッリスにある佛敎信徒のみにても其數三万人計りありとぞ、されど是等の人々は奇を好み新を慕ふが故に誤迷の道に陷るものあり、彼等若しブラマ敎徒が發兌せるモーニングポースト新聞の一節を見ば豁し悟る所あるべし、眞正の佛敎即ち釋迦の敎に最も近きものはブラマ敎に如くものなし、今同新聞の一節を左に譯載せん。

當時西洋各國の人々佛教を變ふに詩想の美麗さ高尙なる所を以てす、されど是もとより佛教の有すべき所にあらず西洋人は十九世紀の基督教的の眼光を以て佛教を觀察するが故に斯る裝飾をなすなり、彼等は須らく印度に渡航し、眞正純潔の佛教を究むべし、是釋迦の教理に最も相似たるものなればなり、遙々遐遼の地にあつて想像附會せん、よりは速に印度に至つて佛教の眞正を學ぶの勝れりさす云々。

衆議員中の信徒

左の如しとて、基督敎新聞に掲ぐ、

京都府第二區撰出　中村榮助氏(組合敎會員)
神奈川縣第一區　島田三郎氏(一致敎會員)
同縣第五區　中島信行氏(一致)　新潟縣第二區　加藤勝彌氏(一致)
群馬縣第五區　湯淺二郎氏(組合)　茨城縣第四區　森　隆介氏(一致)
靜岡縣第七區　江原素六氏(日本美以)　宮城縣第三區　十文字信介氏(未詳)
高知縣第二區　片岡健吉氏(一致)　岡山縣第六區　立石　岐氏(組合)
奈良縣第三區　櫻井德太郎　(組合)

然し尙ほ此外にもあるべし。又た各地方に於て非常の名望あり切に被撰の格を勸呈せらるゝに、寧ろ身を傳道に托して之を承諾せざりし人少なしとせず、本田庸一氏の東北に於ける、齋藤壬生雄氏の上毛に於けるの類其尤なるもの也。

婦人雜誌

「文明之母」は夏休みすと廣告して出でず、之にて廢刊すなど流言するものあり、其の然あらんとを祈る。「開拓新誌」は何故やらん、亦久しく發行なし。

卒業女學生 (二)

横濱二百十二番共立女學校　十一名(飯野蝶子、關屋兼戸子、山本梅子、井鹿子、森德子、小宮仲子、稱所鶴子、小早川京子、メリー、ハウ。メリー、ラクストン。メリー、フヒスク。)

同横濱百七十八番アエリス女學校高等科にて星野こう、平野はま。本科にて佐藤てつ、濱口なみ(右前號記事の脫漏を直す)。

正誤　前號の東洋英和女學校一行は誤植なり

廢娼記事

●娼妓洗身の途

横濱婦人矯風會の經歴及目的等は本誌二百十六號の通信にも見へたるが、同會員は目下娼妓救濟の事に甚だしく心を掛け去る頃ろ芳原及び神奈川より二名の娼妓を請出し若くは引取り手藝を教へて立身の途を給せられたるに雙方容易に去りがたき故か中頃ろ逃走したる由、左れど此度は一層此事に盡力し同港牛島町千四百九十七番地に一家宅を設け此處にて娼妓年アキのもの若くは不幸にして娼妓とならんとする者の爲めに救濟所を供へ之を養ふ上に手藝を教ゆるの仕組を立られぬ、現時の會長バンベテン夫人幷に福垣米子女史甚だ此事に熱心にて尚は右救濟室の取締は片山直夫人外一名にて擔當せらるゝと云へり。

●夏期學校生徒

熊本は過日其講壇に於て廢娼論を稱じ各地方より來會したる人々に訴たへたり、尚ほ同生徒中有志の人十數名此頃加賀町の廢娼俱樂部に參會し將來の事に付質問打合等を爲し大に奮發す各地方への土產此の熱心にまさるものなけん。

●明治女學校マリア之友

廢娼同盟會年會の入費四圓五十錢不足せし旨廣告せしに、明治女學校マリア之友の諸君は甚だしく之を憾き、例の如く學事の餘暇に編物、ぬい針、洗濯、つくろいなどして金四圓を積み、之に對して寄附せられたり。

女報

○跡見女學校生徒の義捐金　同校生徒の有志者は金百五十六圓七十錢を義捐して小石川區內の貧民へ施與するが爲め其分配方を同區役所へ依賴したりと

○產婆改良の成績　京都府に於ては產婆改良の目的を以て明治廿年以來京都市の爲めに產婆講習會を開き又は產婆習所を設置し去る三月までに內修者濟業證を得たるもの三十八名、京都府下より得たるもの四十九名、外に五官の資へたる六十三名の老年者に向ては此際廢業せしむるに名づけての議もありて郡部より上下兩京區役所へ其趣を照合したりといふ右は京都市內に於ける改良の結果なるが今後は更に郡部の爲めにも產婆改良の策を講じ益々產婆業の進步を計らんとの見込みなるよし　(中外電報)

○鹿兒島貧民喧業學校　鹿兒島縣にては今度中原諱、林昌官の兩氏發起となり鹿兒島貧民喧業學校といふを設立する由なるが其目的は男女を問はず士農工商を擇はず廣く貧民の子弟を聚めて其身に適當なる業務を執らしめ資を學問を專一として併せて德義忍耐の何物たるを知らしむ所謂る貧の種を鋤きて富を作り有爲の人と爲すに在りといふ

○須磨女學校特別修學券　同校より鐵の如き券を發し尋東俗婦月謝にて教授し尚ほ事情により教科書をも貸附し而して修學者の義務權利に於て一切異なることなき定めを新設したり右修學券入用の人は同校に申込あるべしと也。

○同校文學會　去十日午后にあり文章唱歌彈琴等はありしが英語科のもの一つもなかりき。

○明治女學校は近日移轉し然會は所云る別舍主義となす由にて此休業中に新築す、卒業式は之が爲め九月末迄で延引せらるゝ由。

○獨立女學校も亦た更に地所を買增し且つ新築し一層職業の途を廣く且つ洋風家政の事を實地に教へらるゝ由。

○フロレンス、ナイチンゲール　此頃ろ女史の七十年祝會ありける。

○女子速記　早きもの識明治女學校速記科の生徒はすでに一と通り卒業したり。

○篤志婦人　陸中國江刺郡羽田村なる千葉勝三郎氏の妻チエと云へるは兼て德行の聞へありしが去る四日岩手縣廳より左の如く賞賜せられたり

江刺郡羽田村　千葉勝三郎妻　チエ

平素貞操を盡くし且夫神經病に罹りし以來六年の久しきに及ぶも專心看護夙夜懈怠なき段奇特に付爲其賞木杯一個下賜候事

○婦人佛教大會　は去る十一日名古屋大谷派別院に開けり當日の來會者は六千餘名にて岩村愛知縣知事夫人黑川中將の夫人令嬢等も來會せられたる由にて演說々教等ありて頗る盛會なりしと云ふ。

○婦人矯風會への義捐金　を請ふ旨の一論文、ヮイ、淺田の名を以て米國ユニチン、シグナル雜誌五月五日の分に出現したり。

○獨逸の女醫論　獨逸各地の獨逸婦人會は嚮にバーデン公國の醫會に請願書を提出して女子も醫學を修むるを得るの許可を以て業とするの不適當なる醫師の數多きに過ぐる等の理由を以て之を退けり、政府の代表者たるアルンスベルゲルは曰く此問題は未だ十分に論し盡したるものにあらず然して之を容るゝと否とは獨逸帝國主務者の意見によるものにて各聯合の許否する者にあらずと又此婦人會より同樣の請願書をヮイメル國會に提出してエナ大學に婦女の入學を許されんとを乞へり然れども獨逸國にては未だ之を許可するの時に達せざるべし(七月九日醫事新論)

○國際女醫會　チカゴ醫事新聞に曰くチカゴ開業する女醫は國際女醫會を開かんと熱心に斡旋し其期日は未だ詳かならざれども千八百九十二年若くは九十三年に同府に開かんとすと(同上)

週報

○官令　八日法律第四號にて酒造稅則中の改正の件を裁可公布せらる●十日勅令第百廿一號にて貴族院事務局官制同第百廿二號にて衆議院事務局官制を裁可公布せらる●十一日勅令第百廿三號にて警察官及消防官服制改正の件同第百廿四號にて宮內省製絲所製絲に係る何々普通懲戒分の件を裁可公布せらる●十四日勅令第百廿五號にて官吏遺族扶助法納金收入規則を裁可公布せらる

○宮廷　八日天皇陛下赤坂離宮へ行幸●十一日天皇陛下第三回內國勸業博覽會へ行幸褒賞授與式を行はせらる●十二日帝國大學へ行幸

○政治　八日山縣、西鄕、山田、松方、青木、芳川、青木、陸奧、の各大臣登閣せり●九日內閣會議に各大臣參集●十日上野華族會館に於て貴族院議員互選會を開かる●十一日內閣臨時會議を開けり●十四日山縣、西鄕、大山、後藤、青木、芳川、の六大臣は內閣會議に參集せり

○銀行　第十五銀行は去る十四日京濱間同盟銀行中へ加入せり

○敎育　十日帝國大學にては卒業證書授與式を執行せり

○警報　六日佐渡相川の暴民鎭定せり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

東洋英和女學校廣告欄

本校の學期は豫科三箇年本科四箇年にして別に二箇年に渉る高等科の設あり入學生は寄宿生百三十五名通學生百名を限とす毎科受持の敎員孰れも熟達善良あり然して本校の敎授は實に完全なりとの世評を獲んとは本校の希圖する所あり規則書等御入用の御方は校長宛に御照會を乞ふ

麻布區鳥居坂十四番地 **東洋英和女學校**

廣告

●○脚氣患者諸君よ左の○●

廣告を讀んで世に名灸有るを知り玉はんことを

●官許専門 天下無比 かつけ根切灸點術●

附言輕症は一二度如何ある重病と雖ども四五度限り全治受合○灸治効能男女を論せずかつけは勿論腰より下の冷て痛む病に大効ある事受合論より證據實驗あれ○當時拙家近邊に類似の家號名乘る同業者出來たるに付番地家號篤と御注意の上陸續御來車あれ

京橋區本材木町三丁目二十一番地松屋橋通り **壽福堂**

梅花女學校

(大阪)生徒新募 梅花女學校

申込期限八月廿五日マデ入學試驗九月一日午前九時

全級へ入學ヲ許ス○規則書ハ郵劵二錢ヲ要ス

(土佐堀) 梅花女學校

梅花女學校

○●○●○●○●○●○●○●○● 福音週報 ○●○●○●○●○●○●○●○●

毎金曜日發兌 植村正久氏編輯

第十八號(七月一日發兌)目次

◎社説○一致敎會の新憲法◎靜思の時○進んで止まる勿れ◎敎報○數十件◎雜錄○數件◎說苑○智惠の礎(第五)時期に伺ふべからず◎史談○蘇格蘭の宗敎改革に付て◎敎義○基督を論ず◎家庭○數件◎外信○數件◎內報○數件◎廣告

定價 一部金二錢○十三部(三ヶ月分)二十五錢○廿六部(半ヶ年分)五十錢○五十二部(一ヶ年分)九十五錢

○府外ハ一冊ニ付郵税五厘ヅヽ

發行所 東京市麹町區三番町十番地 **福音週報社**

●女子必要の雅學協會● 會員は正會員拾錢副會員五錢

本會は雅學奬勵の目的にて會員を募集し和歌和文雅文漢文正詩狂詩戯文發句狂句情歌等を集め添删撰評の上雜誌に登錄し無代價進呈す●規則書入用の向は二錢切手を送らは送呈す●本部は東京牛込區市ケ谷河田町九番地●顧問員には依田百川井上頼國上田万年大沼枕山紅葉山人其外大家數十名あり

生徒募集廣告

本校附屬幼稚園、豫科、本科、高等科ニ入學志願者ハ履歴書相添ヘ來ル九月五日、六日、八日ノ中ニ來校アレ但シ規則書入用ノ方ハ郵劵二錢ヲ添ヘ申込アルベシ

横濱山手百七十八番館 **フエリス和英女學校**

交詢案内

（催促する勿れ委細に申來れ郵券十錢送れ）

●雇ひたき方（甲）

二一	中働	年齡廿五才にして一ト通り裁縫の出來るものを一圓以上の給金にて雇ひ度處あり
二五	召使	十二才以上の小女にて實直なるものを給料一圓にて雇入度處あり
二七	小女	年齡十二三才にして少しづゝ勉强の出來る御宅に無給にて小間使に雇ひ度ものあり

●雇はれたき方（乙）

二四	奉公	年齡廿二才にして一と通り裁縫もいたし氣輕の生れつきにて華族樣か中以上の官員方へ中働きに奉公いたし度し給金は壹圓以上に願ひたし
二五	裁縫	裁縫は重もに婦人洋服にて和服にも巧なり學校若しくは華族其他高貴の御内に教師に雇れたし
二八	奉公	普通小學科卒業の者にて（年齡二十二才）齊家業を學ぶ基督信徒の家に無給にて雇はれ餘暇に產婆術を學び度ものあり
二九	奉公	年齡十四歲にて基督教信徒の家に可成は西洋人に雇はれ度ものあり尤も普通食料小使仕着等一切持參致すに付き毎日四五時間英語學の修業致したし
三五	奉公	年齡十五才の高等小學卒業生にして餘暇に勉學の出來候御宅へ雇はれ度ものあり但し給料は望みなし
三六	敎師	數寄屋橋内東京唱歌會卒業生にして何れの學校にても唱歌の教師に雇はれたし但し年齡廿才にして給料は何程にても宜し
三七	奉公	毎日三四時間勉强の出來る女學校又は中以上の官員の御宅へ無給にて雇はれたきものあり
三八	召使	身元慥なる十三才の小女にして堅き御内へ小間使に雇はれたし但し餘暇に習筆を教授せらるれば給金に望なし
三九	奉公	年齡十五才にて身元慥なるものあり官員の御宅又は堅き御内へ小間使に雇はれたし但し給金は先樣次第にてよろし

●英國ヘンリー、ザー、ボーン氏編纂
●經濟雜誌社譯

政治家必携

[illegible]

政事類典

全五册價金拾貳圓紙數キク判四千九百ページ、背革金字入クロス表紙

右は原名「ポリチカル、サイクロペヂア」と題し行政、經濟、財務、商業、法律等より交際上の諸項に至るまで上、羅馬、希臘の往昔に溯り下、今日の現狀を審かにし原委沿革を歷叙し政治の事項殆ど網羅して遺す所なく政治域内の諸科に通曉するに於ては則ち復之れより若くものなき書にして發刊以來大に世の好評を博し既に再版をも賣盡し暫らく品切の處國會の開期既に迫りたるを以て此書を要望せらるゝもの陸續斷へず依りて今般增刊せり

初舞臺に立て大に政治の得失を討議せんとする議員諸君は勿論苟も帝國議會の政治の事項を論議せんと欲するものは須臾も坐右に缺く可らざる珍書也請ふ購求あらんことを

發兌 東京京橋區彌左衛門町 經濟雜誌社●賣捌 東京小林○丸善○博聞社○中西屋○與論社○●大坂岡島○梅原○丸善○松村○嵩山堂○●京都大黒屋●横濱丸善●名古屋川瀬

通信女學講義錄 第七卷

七月十五日出版
價金三十二錢
全國一般無郵稅

女學雜誌社
麹町區富士見町二丁目一番地

明治二十三年七月十八日印刷
明治二十三年七月十九日出版

發行所 東京麹町區富士見町二丁目一番地 女學雜誌社

編輯兼發行人 東京麹町區富士見町二丁目一番地寄留 巖本善治

印刷人 東京神田區三崎町壹丁目十三番地寄留 森田豐

遞信省認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

交詢案内

（催促する勿れ委細に申來れ郵券十錢送れ）

●雇ひたき方（甲）

二一	中働	年齢廿五才にして一ト通り裁縫の出來るものを一圓以上の給金にて雇ひ度處あり
二五	召使	十二才以上の小女にて實直なるものを給料一圓にて雇入度處あり
二七	小女	年齢十二三才にして少しづ丶勉强の出來る御宅に無給にて小間使に雇ひ度ものあり

●雇はれたき方（乙）

二四	奉公	年齢廿二才にして一と通り裁縫もいたし氣轉の生れつきにて華族樣か中以上の官員方へ中働きに奉公いたし度し給金は壹圓以上に願ひたし
二五	裁縫	裁縫は重もに婦人洋服にて和服にも巧なり學校若しくは華族其他高貴の御內に教師に雇れたし
二八	奉公	普通小學科卒業の者にて（年齢二十二才）産婆業を營まる丶基督信徒の家に無給にて雇はれ餘暇に産婆術を學び度ものあり
二九	奉公	年齢十四歳にて基督教信徒の家（可成に西洋人）に雇はれ度ものあり尤も普通食料小使仕着等一切持參致すに付き毎日四五時間英語學の脩業致したし
三五	奉公	年齢十五才の高等小學卒業生にして餘暇に勉學の出來候御宅へ雇はれ度ものあり但し給料は望みなし
三六	敎師	數寄屋橋內東京唱歌會卒業生にして何れの學校にても唱歌の教師に雇はれたし但し年齢廿才にして給料は何程にても宜し
三七	奉公	毎日三四時間勉强の出來る女學校又は中以上の官員の御宅へ無給にて雇はれたきものあり
三八	召使	身元慥なる十三才の小女にして堅き御內へ小間使に雇はれたし但し餘暇に習筆を教授せらるれば給金に望なし
三九	奉公	年齢十五才にて身元慥なるものあり官員の御宅又は堅き御內へ小間使に雇はれたし但し給金は先樣次第にてよろし

通信女學講義錄 第七卷

七月十五日出版
價金三十二錢
全國一般無郵稅

麴町區富士見町二丁目一番地
女學雜誌社

●●英國ヘンリー、ヂー、ボーン氏編纂
經濟雜誌社譯

政治家必携

再版 泰西 政事類典

全五册價金拾貳圓紙數キク判四千九百ページ、背革金字入クロス表紙

右は原名「ポリチカル、サイクロペシア」と題し行政、經濟、財務、商業、法律等より交際上の諸項に至るまで上、羅馬、希臘の往昔に溯り下、今日の現狀を審かにし原委沿革を歷叙し政治の事項殆ど網羅して遺す所なく政治域內の諸科に通曉するに於ては則ち復之れ丶若くものなき書にして發刊以來大に世の好評を博し既に再版をも賣盡し暫らく品切の處國會の開期既に迫りたるを以て此書を要望せらる丶もの陸續斷へず依りて今般增刊せり

帝國議會の初舞臺に立て大に政治の得失を討議せんとする議員諸君は勿論苟も政治の事項を論議せんと欲するものは須臾も坐右に缺く可らざる珍書也請ふ購求あらんことを

發兌 東京京橋區彌左衛門町 經濟雜誌社 ●賣捌

東京小林。丸善。博聞社。中西屋。興論社。●大坂岡島。梅原。丸善。松村。嵩山堂。●京都大黒屋●橫濱丸善●名古屋川瀨

明治二十三年七月十八日印刷
明治二十三年七月十九日出版

發行所 東京麴町區富士見町二丁目一番地 女學雜誌社

編輯兼發行人 東京麴町區富士見町二丁目一番地寄留 巖本善治

印刷人 東京神田區三崎町壹丁目十三番地寄留 森田豐

遞信省認可

女學雜誌

第二百二十三號目次

社說　事業論○詩仙（万葉集、宗敎心なし、貴族的、優弱、長歌長からず、歌の佛性、歌の未來）。

論說　在布哇受洗始末（安藤太郎）。

批評　正行卿○吉野靜○江戶むらさき○國本○愛民公論○天則○作者俳人○新誌書樓○冷風一拂

雜錄　靜女塾主平尾みつ子を訪ふ○按摩某の敎へ○躰を洗ふ事○倫理問答○摸倣文學○ミルトン傑作の生る所以○知事の細君に貧民の食を嘗しむ○食物と溫度○きよめぬ庭

小說　うき世

寄書　世の貴婦人に訴ふ（万春野史）

時事　逆外國。女學反。板垣退助君。日月と芙蓉。福澤翁故新島襄君。晷きに謝す。學生及世界。財務之より亂雜せん。非深梶之助君

通信　鳥取市女報

女報　但馬、西京、靜岡、鳥取の女報。神戶英和女學校洋行生。天竺の寡婦。支那の赤兒殺。男のウバ。獨逸の女醫。ラマバイ益々熾んなり

Let no one say, the children will not understand it, for thereby he deprives them of their greatest good.—Froebel.

本號

「事業論」は　秀卓些か讀者を益すべし

「詩仙」大尾に　万葉集及歌の未來を論ず

「小品の文」　福澤翁、新島先生、板垣伯

「新發明肖像」　新島襄未亡人の圖

見よ

七月廿六日發兌　第二百廿三號　一冊定價六錢

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY